

---

# バカと忍と召喚獣

ふりたー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと忍と召喚獣

### 【Nコード】

N5628Y

### 【作者名】

ふりたー

### 【あらすじ】

革新的な学力低下対策として『試験召喚システム』を初めて導入していた文月学園。そこで個性的なメンバーと転校生の主人公のお話

## プロローグ（前書き）

はじめまして「ふりたー」です。よろしくお願ひします  
処女作なので頑張っていきたいです

タイトルは仮なんで変わるかもしれません

## プロローグ

### 文月学園

この学園には科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』なるものがある。

『試験召喚システム』とは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことができるらしい。謂わば、使い魔のよ  
うなものか？と俺は認識している。

学力低下が懸念される昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを  
高める為提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、『召喚獣』を用いたクラス単位の戦争

『試験召喚戦争』というものだ。

『試験召喚戦争』というのは…まあ詳しい説明は後でもいいだろう。

なぜ説明口調なのかって？

それは、俺はこの学校の転校生として2年生から通うための確認み  
たいなものだ。

とりあえず、楽しい学園生活を送ればいいかなーと気楽に構えて  
ようと思う。

学園へと続く道の両脇には新入生を迎えるかのように桜が咲き誇っている。

柄にもなく見惚れながら歩いていたが、玄関前に辿り着いた時に思わず歩くのを止めてしまった。

なぜなら、その桜よりも印象強いものが目に飛びん込んできたからだ。

「お前が今日からこの学園へ通う服部正吾か？」

「ッ！はい、今日からこの学園へ通うことになってる服部正吾です」

返事に躓いてしまった俺は悪くないと思う。

目の前にいる男性は浅黒い肌した短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

その姿はまさに筋肉隆々という言葉がふさわしいだろう。多少、話には聞いていたが想像以上であった。

「そうか。俺の名前は西村宗一だ。何か分からないことがあったら俺に言うなり他の先生に言うなりしてくれ」

「よろしく願います。鉄じ　　西村先生」

まずい。思わず西村先生の渾名である「鉄人」と呼ぶところであった。

鉄人、鉄人と何回も聞かされていたら思わず言っちゃいそうになるよね！

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「なぜお前が俺の渾名を知っているのか・・・まあいい、学園長室に案内するから付いてこい」

ちなみに鉄人というのは西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンが関係しているとのことだ。真冬でも半袖でいるあたりも理由の一つらしいが。

っと、いつまでも西村先生の事を説明していても意味はないと思い、西村先生の後を追ったのだった。

## プロローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘お願いします  
批判等はやさしくがいいです（チラッ

## キャラ紹介（前書き）

主人公の説明です

チラッと名前出ましたが詳しいことを



## キャラ紹介

### キャラ紹介

名前 服部正吾はっとりしんご

身長175cm 体重50kg 誕生日7月7日

趣味 ゲーム関連 情報収集 悪戯

特技 両利き 隠密行動 家事全般 変装 武術

### その他

黒髪黒目 若干吊り目 髪はちょっと長い 女装が似合う 上の中  
性格は飄々としていて掴みどころがないといわれる。

身体能力は異常に高い。鉄人とは互角でやりあえる。頭も良い。毒  
舌ドS。

一人暮らし ムツツリーニとは転校前からの親友

### 召喚獣

ムツツリーニと似たような忍者衣装

武器の主力は鎖鎌。他には棒手裏剣やクナイなど様々なものを武器  
になるものを全身に仕込んでる。

腕輪能力『分身』

装備等を増やせる。増やすものによって消費点は変わる。

召喚獣自体も分身できます。

## キャラ紹介（後書き）

変更するかもしれませんが基本的にはこっぴつ感じですよ

## 第一問

side正吾

俺は西村先生と共に学園長室へ行き挨拶を済ました。と言っても既に何回も会ったことあるしね！

口の悪さは相変わらずだったよ全く。けど元気なのはいいことだよ、うん。

バアさんとの会話なんて誰得だしね？割愛させてもらうよ。

その後は職員室で挨拶したよ。ちなみに俺はFクラスって事で今は担任の福原慎先生とともに廊下を歩いている。

途中、Aクラスを覗いている生徒がいたが何かを思い出したかのようになんて小走りで行った。

その生徒の行き先は・・・Fクラスじゃないか。それに情報で見たことのある顔だった。

彼が例の『観察処分者』なのかな？なんて考えていると

「服部君？どうかしましたか？」

と、福原先生に声を掛けられた。緊張してる？なんて思われているのかね。

とはいえ心配してくれるだけありがたいので、大丈夫です。と答えとく。

そんなこんなでFクラス近くに来たんだが、「ウジ虫野郎」とか「このクラスの全員が俺の兵隊だ」なんて聞こえてくる。

なんて会話だろうか？しかしなんだかオラ、ワクワクしてきたぞ！

side 明久

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

悪い考えが脳内を駆け巡ったが考えてても仕方ない。

これから共に過ごす仲間たちを信じよう。

そう思つて、僕は勢いよくドアを開けてから中の皆にできる限りの愛嬌たっぷりと言い放った。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

台無しだっ！

「聞こえないのか？ああ？」

なんて失礼な教師だろうか。そう思い僕は教壇に立っている男を見た。

そこに居たのは、僕の悪友、坂本雄二だった。決して教師ではない。

「……雄二、何やってんの？」

聞いたことのある声だなあ、なんて思ったけどまさか僕の悪友が教壇でいきなり罵声を浴びせてくるなんて普通は考えられない……いや、雄二ならあり得るかと思つていると

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる雄二。その言葉を聞いて思わず顔が綻ぶ。

つまり雄二を説得すれば、このクラスを動かせるって訳だ。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイト達を見下ろしている雄二。

そう、クラスメイトは皆床に座っている。

どうしてか？その理由は簡単。椅子が無いからだ。

「それにs」……………転校生が来るらしい「ホントかい！？ムツツリーニ！？」

突然会話に入り込んできた彼は土屋康太。小柄で口数が少なくおとなしい人物だ。運動神経はいいのだがあまり目立たない。やっぱり目立つとやりにくいのかな？いろいろと。

だが、今はそれどころじゃない！転校生の情報だろう！

「ムツツリーニ！転校生は女の子！？女の子だよね！？」

「うるさい黙れ明久。して、康太。その転校生の情報は？」

「……………なぜか情報がブロックされていた」

「その程度、いつもみたいに解除出来ないのか？」

「……………すまない。想像以上に強敵だった」

「…そうか、ありがとな」

そういい、雄二は考え事をし始めた。こういう時の雄二は何を考えている分らないので無視して空いてるスペースに座るのが得策だろう。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

その時、不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせの付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので。あと、転校生の紹介をしますので」

一体、どんな人が来るのだろうか？

## 第一問（後書き）

主人公がFクラスとかはご都合主義ってやつでお願いします

## 第二問（前書き）

やっとと主要キャラとの絡みが多少



## 第二問

side正吾

福原先生に「しばらく待機しててください」と言われて待ってるんだけど緊張しちゃうぜ!

ファーストコンタクトは重要やん?ここで滑ったら楽しい学園生活は送れないと思うかも!

そんなことを考えていたら呼ばれたみたいなんで逝ってくる(ギリッ字が違うつて?気にしたら負けだぜ、うん。

「転校生の服部正吾くんです。どうぞ」

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ…なんでもない。特技は盗ちよ…なんでもない。よろしくお願いします」

フツ…我ながら完璧な自己紹介だった。この挨拶ならアイツは気付くだろう。

「…ッ!」

視線をそちらに向けるとやはり気付いたようだ。さすが俺の親友…もとい相棒か。

席は自由らしいので俺はその顔なじみの元へと向かったのだった。

side ムツツリーニ

……担任の福原先生が転校生が来ると言っていた。この俺が情報を得れなかった転校生。凄く気になる。

そして、教室に入ってきた男を見た時に俺は目を疑った。

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ……なんでもない。特技は盗ちよ……なんでもない。よろしくお願いします」

……ッ！この挨拶にあの顔、そして声。間違いなくアイツだろう。道理で情報が得られなかった訳だ。どうせ自己紹介に満足してるのだろう。ソイツは少し顔を綻ばせながらこちらにやってきた。

side 正吾

俺の自己紹介が終え、クラス内で自己紹介があるらしいがあらかじ

め調べてあるから確認程度でいいだろう。それよりも楽しみな事があるしな。俺は声を潜めつつ隣の親友に話しかけた。

「よう、康太。久しぶりだな。1年ぶりか」

「……………久しぶり正吾。大体そのぐらい」

変わってないな相変わらず。だが、それがいい（キリッ  
まあそれはいい。唐突だが本題だ。

「……………この学園に仕掛けられてるカメラや盗聴器はお前のか？」

「……………流石。バレないと思っていたが」

やはりか。康太以外でこの手の事の高スキルが奴は情報になかったからな。

「いや、俺も気を抜いていたら分からなかった。前より腕を上げるな」

「……………当然。日々の精進」

「さすが相棒。ところで放課後時間あるか？」

「……………あるが？」

確認も取れた事だし、乗ってくるだろうと確信し俺はニヤリとしながら言う。

「この学校の案内してくれない？それに…1人より2人の方が捗るだろう？」

「……………もちろん」

俺は満足し御礼を言う。ちなみにこの話の途中で康太は自己紹介を済ませている。

途中、「ダアアーリーーン!!」なんて大合唱が聞こえてきたが無視だ。

皆の紹介が終盤に差し掛かった頃、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん…」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声上がる。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします…」

途中から声のトーンが下がる。そりゃ途中から来たわけだし、男ばかりだし仕方ないだろう。

「はいつ!質問です!」

「あ、は、はいつ。なんですか?」

「何でここにいますか?」

聞き様によつては失礼な質問だが仕方ないだろう。彼女は本来Aクラス上位の実力を有しているからだ。

「そ、その…」

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました…」

その言葉を聴き、クラスの連中は『ああ、なるほど』と呟いていた。そんな彼女の言い分を聞いてか、クラス内でもちらほらと言いつの聲が聞こえてきた。

『そういえば、俺も熱一（の問題）が出たせいでFクラスに』  
『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』  
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』  
『黙れ一人っ子』  
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』  
『今年一番の大ウソをありがとう』

想像以上に面白そうなクラスだなと実感したよ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中で彼女は逃げるように吉井ダイリンと代表の隣の空いてる卓袱台に着こうとしていた。

吉井ダイリンは見ただけでもドキドキしているのが分かった。あれほど分かりやすい奴も珍しいだろう。

彼らが話し始めた姿を見てか、クラス内でもチラホラとそちらを意識している者が多数いた。

そこで俺は気付いてしまったんだよ…

俺、転校生なのに目立ってなくね？

いや、別に仕事柄もあるし性格もあまり目立ちたがりじゃないけどさ、多少は注目度があってもいいんじゃないかなあ（チラチラッ

「……………なんで俺は注目されないの？って顔をしてる」

さすが康太。よくわかってるじゃないか。

べ、別に悲しくなんかないんだからねっ！

第三問（前書き）

短いですがどうぞ

### 第三問

俺がさつきまで寂しい思いをしてたらな、教卓が机がゴミ屑になっ  
たんだよ。

なにを言ってるかと思うが俺もよく分からない。

ただ、簡潔に言うとなんか先生が軽く叩いたら崩れ落ちたんだ。

ちなみに、説明してなかったがFクラスだけあって設備がボロい。  
上のクラスに行けば行くほど設備が良くなるって仕様だ。

「え〜…替えを用意してきます。少し待っていてください」

福原先生が気まずそうに告げて、教室から出て行った。

全くなんて面白い学校だ。

なんて、思っていると吉井と坂本の二人が立ち上がって廊下へ出て  
行った。

大方、試召戦争のことではないかと俺は考える。代表の坂本は血気  
盛んそうだしな。それに神童だったらしいし勝つ策でもあるのだろ  
う。それに吉井も何か思うような事がある顔をしていたし。

思わず顔が口角が吊り上ってしまっぜ

「……………悪い顔してる」

「そりゃそうだろう。初日から面白いことになりそうだけ康太」

「……………?」

「恐らくだが、うちの代表サマは初日に戦争の引き金を引くと思っ  
ぜ」

Dクラスになど付け加える。そうしていると話していた二人が戻って  
くる。坂本の顔は僅かにだが楽しそうな顔してる。

先生が戻り教卓を替えて、HRが再開されて自己紹介の続きが始ま

った。まだ終わってなかったのか。  
特に何も起こらず、また淡々として時間が流れた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」  
「了解」

先生に呼ばれ、坂本はゆつくりと教壇に歩み寄る。  
その姿はまさにクラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように見える。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

その先生からの問いに、鷹揚にうなづく坂本。  
そして、坂本は自信に満ちた表情で教卓に上がり、俺らの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

俺は口パクで「キ・リ・シ・マ」と呟いたが伝わっただろうか。若干、顔が青ざめている様子を見ると伝わったのだろう。嬉しい限りだ。

「転校生、後でお話がある。それは置いといて皆に一つ聞きたい」  
坂本はゆつくりと全員の間を見つめるように告げる。  
皆の様子を確認した後、坂本の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台。皆の視線も坂



本の視線を追う。

「Aクラスは冷暖房完備な上、座席はリクライニングシートらしいが」

「不満はないか？」

「大ありじゃあっ!!」

これは二年Fクラスの魂の叫びであろう。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

「いくら学費が安いからといって」

とまあ、このように上手くクラスの意識をまとめ上げてるのは流石だな。

この様子じゃ、クラスをまとめ上げるには問題ないだろう。

だが俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

俺は話を聞いてなかったが堰を切ったかのように不満の声が出たのだろう。それぐらいは想像がつく。

坂本は級友たちの反応に満足したのか。自身に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、俺は次の言葉を待ちわびる。

「 FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思  
う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた

## 第四問

Aクラスへの宣戦布告。

普通ならそれは現実味の乏しい提案に思えるだろう。現に…

『勝てるわけない』

『これ以上設備が落とされるなんていやだ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

そんな悲鳴が教室内の至る所から聞こえる。それと最後の奴は告白と取られても仕方ないだろう。

しかし、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだろう。

文月学園のテストには点数の上限が無い。

そして、俺たちが戦争を仕掛ける『試召戦争』とはテストの点数が重要になる。

Aクラスはテストの成績優秀者トップ50、比べてFクラスは下から50人。正気の沙汰かと言われるもおかしくはない。

しかし、うちの代表サマは

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

と述べている。

『何をバカなことを』

『出来るわけない』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。だが、

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

この言葉を受け、クラス内はざわ…ざわ…とざわめく。別にギャンブルをしている訳ではない。俺が思いつく中では5人辺りか。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上からみなを見下ろす坂本。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!!」(ブンブン)

「は、はわっ」

まずは康太。この親友の情報収集能力は役に立つ。それに俺も出来るし、他のクラスより圧倒的にアドバンテージを得れるだろう。

「土屋康太。こいつがあの特徴的な、寡黙なる性識者だ」

「……………!!」(ブンブン)

ばらしちゃったか。それが後でミスにならなければいいが。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

次は姫路。学年次席の実力があって確実にクラスの主戦力になるだろう。

それに男ばかりの中で活躍すれば、クラス内の士気も上がるだろう。

「木下秀吉だっている」

次に木下。彼の特技も戦闘以外で役立つであろう。それに性別『秀吉』なんて噂もあるらしく人気があるそうだ。性別：秀吉とは気にしたら負けだろう。

「当然俺も全力を尽くす」

それに坂本だ。元神童でちゃんと勉強すれば実力はあるのだろう。そして、先ほどまでの演説。大将として相応しいのではないか？

「それに、吉井明久だっている」

そう、最後に吉井だ…って、アレ？ 凄いクラス内が静まり返ってるんだが…

吉井は『観察処分者』というちょっとお茶目な一六歳につけられる愛称を持っているのだが、教師の雑用係を召喚獣を使ってやらされる。召喚獣で雑用をやらされるってことは操作技術は並大抵ではないだろう。

だが、デメリットとして召喚獣が喰らったダメージがフィードバックするらしい。

しかし、どうやら俺の認識はクラス内では違つらしく士気が盛り下がっていた。

それに坂本も特にフォロー無く無視をしていた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば、全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

どうやら、吉井の事は忘れられたらしく士気は戻っていた。

坂本は満足したのか、吉井と話し始めたが内容はどうやらDクラスへの宣戦布告の使者の話のようだ。

下位勢力の宣戦布告の使者は見せしめに合っただろう。どうやら、いいネタを手に入れられそうだ。

それにしても、吉井を捨て駒のように使う坂本も坂本だが、それを簡単に信じる吉井も吉井だろう。

バカ正直な吉井は、歓声と拍手に送り出され、毅然とした態度でDクラスへと向かっていった。

さて、気付かれないようあとを追いますか。どうやら康太も付いてくるようだ。

「騙されたあつ！」

吉井は命懸けで廊下を走り、Fクラスへと転がり込んできた。

ちなみに、俺は天井にへばりついてる。康太はワイヤーを使ったのが同じような体勢だ。

「いい映像が手に入ったな」

「……………悪い顔」

「この吉井をボコしてる奴らの弱みを握ればそりゃニヤけちゃうだろ？」

「……………たしかに」

「それにボコしては無いが、代表の平賀の弱みも握れたことになる。恐らく指示を出したのは平賀だろう。それに指示を出していなかったとしても、クラス内での暴力を見過ごしてるんだから代表としては問題だろう」

「……………相変わらず悪知恵は働いてる」

褒めるなよ、と返しておく。

気配を消して出たとはいえそろそろ気付かれるだろう。康太とアイコンタクトを交わし教室に戻る。

まあ、戻ったら代表サマに捕まった。想定内である。

「よう康太と服部。今からミーティングを行うから来い。それにあの件のこともあるしな」

後ろを見ると吉井、姫路、木下、島田もいる。主力メンバーか。改めて挨拶するのも悪くない。

ちなみに、あの件とは「キ・リ・シ・マ」の口パクだろう。

「……………コクッ」

「俺も構わない。改めて自己紹介もしたいしね」

分かった。と呟き坂本たちは屋上へ向かい歩きだしたので付いて行った。

向かう途中、姫路の下着の色はみずいろと康太が言っていた。その執念は素晴らしいな。

とりあえず、屋上に着いたので一息ついていたが皆の視線がこちらに向いているのに気付く。

これは何か話せという視線やでっ…！

「では、改めてだけど今年度から転入してきた服部正吾だ。好きなように呼んでくれ。その康太とは親友もとい相棒だ。よろしく」

こんなのでいいだろう。すると各々も紹介し始めていたが、俺と姫路以外は一年の時同じクラスだったから仲が良さが垣間見える。それが終わり質問タイムって奴が始まる。こういうのって転校してきたって気分になるよね！時間も少ないからすぐ終わっちゃったけど！悲しいぜおい！

話は変わるが戦争開始は今日の午後からだそうだ。

吉井の主食は水と塩と砂糖や、姫路が弁当を作ってくるなんて話も出てきたがどうしても地雷な臭いがするぜ。それはともかく、そろそろ話を戻すべきだろう。

「さて、話がかかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

上から坂本、木下、姫路、坂本の順だ。木下の爺言葉のギャップもありなのかもしれんな。



「どんな考えですか？」

「そうだよ雄二！どんな策があるのさ」

「色々と考えはあるんだが…服部、お前なら分かるか？」

と、突然話を振ってくる坂本。恨みでもあるのだろうか、もしくは俺の頭を見てみたいというところか。

「Eクラスは戦う価値もないってところだろ。姫路が万全なら勝てる」と読んでるんじゃないか？」

「その通りだ。振り分け時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、周りを見てみる明久」

「えーっと…」

そう言われ吉井は周りの見渡す。

「美少女三人とバカが二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？雄二が美少女に反応するのも驚いたけど服部君も反応するの!？」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!？どうしよう、僕だけじゃツツコミきれない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニに服部」

と、ここで美少女といわれる木下が落ち着かせる。男だけと。

「そ、そうだな。要するに服部の言うとおり姫路が問題ない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「? それならDクラスとは厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えない」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

と、ここで代表サマからの視線を受ける。また説明しろと。

「ダーリン。これはFクラスの初陣だ。ここで、行き成り策も無しにAクラスに突っ込んで無様に負けたら代表サマの信頼が無くなるだろ？今後の試召戦争に影響が出てもいいなら別にいいが」

「そ、そうだね…それに、ダーリンって…」

「自己紹介で言ってたろ？それに経験を積むと共に今後の景気付けも兼ねてるんだろ。打倒Aクラスに必要なピースってのもありそうだが」

「俺の考えてる通りだ。なかなかやるじゃないか」

ふむ、推測通りだったか。やはり元神童と言ったところか。

「あ、あの…」

姫路が大きな声を出したが、何かあるのだろうか？

「吉井君と坂本君は前から試召戦争について、前から話あってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為に明久に相談されて

」

「それはそうと…」

明らかに話を遮ったダーリン。これはいい情報だ。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味ないよ」

「負けるわけないさ」

坂本が笑い飛ばす。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

みんなが怪訝そうに坂本を見る。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

その根拠のない言葉には不思議な力がある。

「いいわね。面白そうじゃない」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずりおろしてやるかの」

「……………(グッ)」

「が、頑張りますっ」

皆やる気だな。これが青春って奴か、素晴らしいねほんと。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺たちは坂本の作戦に耳を傾けた。

## 第四問（後書き）

教室へ戻る前

「そっぴゃ、聞きそびれてたが…なぜ俺と翔子の関係を知っている？」

「俺も康太と同じようなスキルがあるんだよ。そのぐらい朝飯前」

「…！そっぴゃ、お前にも康太と同じような事をするよう頼むかもしれない。それと、このことは内密にしてほしい」

「前者はいいが、後者はどうしようかな」(ニヤッ)

みたいな会話がありましたとき。

やっと、試召戦争に入れます

## 第五問

午後に入り、予定通りFクラス対Dクラスの試召戦争が始まった。今現在、渡り廊下で交戦が始まったのではないか。実際、声が聞こえてくるしね。

かくいう俺は何をしているかというところ…

「テストって暇だなあ・・・」

教室で補給試験を受けていた。

俺って転校してきたじゃん？だから、召喚獣を召喚しようにも点数が無いんだってさ。

隣では姫路も受けてるよ。熱で倒れてテスト受けれてないからね。

「だるうー・・・」

「・・・」

「ふわあー・・・」

ちなみにクラス内には、坂本と坂本の護衛数人に中堅部隊といったところか？そいつらが待機している。

「ふうー・・・」

「・・・」

「はあー・・・」

暇。この一言に尽きる。

「坂本、暇」

あまりにも暇すぎて、ついすっかり話しかけてしまふ俺は悪くないと思う。

「真面目にやれ」

うちの代表サマはそっけなかった。もう少し構ってくれてもいいのではないか？

べ、別にさみしいって訳じゃないんだからねっ。

「いや、やってるからさ。今、現在の状況とか教えてくれてもいいんじゃない？」

「今現在は変わりはないだろう。だが、渡り廊下での戦力はあちらが上だ。少ししたら、増援か策を求めに来るだろう」

俺は、話を聞きながらテスト用紙に答案を書き続ける。そこまで流れを読んでるのね。

「それにしても服部。テストのペーシやけに早いが大丈夫なのか？」

「両手でペン持って答案解けば早く終わるだろ。それに全部程々にしてるしな」

「両手で書いて解くって・・・保険としてお前にもちゃんと全部受けてもらいたい教科もあるんだが」

「大丈夫だろ。あの作戦がばれる可能性は少ないと思うが・・・そうだな、一教科ぐらいは全部解くよ」

保険は掛けといて損はないからな。そうと決まれば、やる気を出さねばな。

そんな時に、教室のドアが開く。あれは確か前線部隊に居た須川だ。坂本の予想通りだ。

「坂本！渡り廊下でFクラスが徐々に劣勢になってる。何かいい作戦は無いか？」

これも想定通りか。そういえば先ほど康太からDクラスは採点に船越先生一（45歳独身）を呼ぶらしいとの情報を手に入れたそう  
だ。坂本なら、それを逆手に取るのは造作もない。

「須川、これを放送室へ行つて流してほしい。」

そう言つて、坂本はメモを須川に渡す。

「構わないが・・・それで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。そうすれば、俺たち本隊が合流するまで保つだろう。」

あれを流すのか・・・吉井はダイリンご愁傷様としか言えない。

メモの内容を読んだのか須川はとても軽やかに放送室へ向かつて  
いた。

「さすが代表サマ。なかなか鬼畜なことをするじゃないか」

「褒めても何も出ないぞ？」

いや、褒めてないが。

こいつはすでに末期なのかもしれない。俺も人のことは言えないか。

《ピンポンパンポーン》

これは放送が流れる前の音か。

須川、なかなか行動が早いじゃないか。まさか、こんな早く流れるとは思っていなかったぜ。

《連絡いたします》

《船越先生、船越先生》

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

渡り廊下から吉井の魂の叫びが聞こえた気がする。  
ダーリン

強く生きるよっ…！



## 第五問（後書き）

次回にはDクラス戦を終わらせれたらいいかなーと思ったり

## 第六問（前書き）

Dクラス編終了ですー  
プロフィールちよい変更

## 第六問

やあ、俺だ。あの放送の後だが、俺はいまだにテストを受けている。本来なら、廊下で戦ってる前線部隊を収集する為に出陣する予定だったんだが、坂本曰く、姫路同様に顔を知られてない俺をここでは使いたくないようだ。そりゃそうか。

しばらくすると、廊下からガシャアアン！ブシャヤツ！など聞こえてくる。

恐らく、吉井辺りが時間稼ぎで窓を壊したり消火器を利用したのだろう。作戦としては良いだろうが、後の処理はどうするのだろうか。西村先生の補修が待ちうけてるだろう。

前門の船越、後門の西村と言ったところか。別に上手くはないね。

くだらない事を考えていると部隊を回収した坂本たちが戻ってきた。帰ってきて早々、坂本と吉井が会話をし始めたので俺も混ざることになろう。テスト？終わったかな！

「よう、お疲れダーリン。」

「ありがとう服部君。それと僕が言い始めたことだけど、ダーリンってのは止めてほしいかな」

「はいはいツンデレツンデレ。それより、坂本が何か言いたそうぞ」

これは事実だ。実際、坂本は真面目な顔をしている。

「ツンデレじゃないからね！？で、雄二何か用？」

「明久、よくやった」

俺は驚愕した。まだ、ほんの少し時間しか関わってないが分かる。あの坂本が吉井を称えるなんて……だが、それも一瞬。坂本の顔がわずかに綻ぶ。俺は理解した。あの校内放送のことでいじろうしているのだろう。ならば、先手を打つ！

「放送を指示したのは坂本だぞ。ダーリン」  
「シャアアアアツ！」

吉井は迷いの無い鋭い踏み込みで右手に持っていた包丁を突き出すうとしていた。殺意を持った人間ってのは怖いな。だが、坂本はそれを予測していたのか次の一手を繰り出す。

「あ、船越先生」

たった一言。その一言が吉井を掃除用具入れに撤退させるほどの脅威を持っていた。

言葉ってのはどんな凶器より恐ろしいとはよく言ったものだ。坂本は思ったよりいじれなかったのが不満だったらしいが、すぐに切り替え、「Dクラス代表の首を獲りに行くぞ！」なんて言っており、既に教室を出ようとしている。さすがに放置はかわいそうだから吉井に声をかけとくか。

「ダーリン。船越先生なら居ないぜ。ありゃ、坂本のウソだ」

吉井は恐る恐る掃除用具入れの隙間から教室内の様子を探っている。安全を確認したのか、掃除用具入れの扉を蹴り開け勢いよく飛び出てくる。

「ありがとう、服部君！逃がすか雄二いいいいっ！」

物凄い早さで廊下を駆け抜ける吉井。  
後を追うように俺も廊下を駆ける。さて、ここまでの暇だった鬱憤を払いさせてもらいましょかね。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

やってるやってる。吉井の後を追ってたが、Fクラスの人物と一緒に居たら俺の存在がバレちゃうじゃん？  
だから、今は別々という訳なのさ！。

吉井は坂本を殺ろうとしてるが、既に坂本と本隊はDクラス代表とその本隊に囲まれている。

吉井、そんなに悔しそうな顔をするな。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

辺り一帯に坂本の声が響く。

端から見れば、Fクラスは劣勢だろう。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けは無い！追い詰めて討ち取るんだ！」

Dクラスの個々の実力はFクラスに勝る。つまり、1vs1なら有利な状況を作り出せる。

Dクラス平賀の指示は適切だと思える。故に、本隊も分散し掃討に掛かっている。

だが、それは相手の戦力を知り尽くしている時だ。

今現在は、放課後で下校中の生徒もいる。そして、今日は二年生になって初日である。この学園の規則で、クラス発表は個人毎だ。クラス毎の正確な情報を手に入れるのは難しいだろう。

つまり、姫路と俺というイレギュラーを知られてる可能性は低いということだ。

だから、俺は悠々と下校中を装いながらDクラス代表と近衛部隊の近くへと近づく。

ちなみに、目の前には吉井が近衛部隊に平賀への行く手を阻まれている。

「あの…」

「なんだい？今は、試召戦争の終盤なんだ。迷惑になるからどいて貰えないかな？」

「Fクラス服部正吾、Dクラスの近衛部隊に現代国語で勝負を申し込もうかなと」

『えっ！？』

そりゃ、そんな反応になるだろう。顔を始めて合わす奴が、いきなりFクラスと宣言し大人数相手に戦いを申し込んだのだから。

「驚いてるところ悪いけど…試験召喚」

そう言って、自分の召喚獣を呼び出す。相手の近衛部隊も急いで召喚している。相手は5人。

相手の平均点は120点ぐらいか。代表を守るんだから、クラス内では実力があるのだろう。だが

《Fクラス 服部正吾 現代国語 401点》

「はっ!?!」

またまた驚いてるが、戦いはもう始まってんだよね。

近くで棒立ちになってる1人の召喚獣に素早く近づき鎖鎌で首を刈り取ると同時に、未だに棒立ちの他の召喚獣の眉間に棒手裏剣を投擲し見事的中。やはり、人がベースなのか急所は弱いみたいだ。

「戦死者は補習!」

どこからともなく現れた西村先生に連れ去られていく近衛部隊の二人。ご愁傷さまである。

やっと落ち着きを取り戻したのか残りの3人は構えを取る。

「なぜFクラスにこんな点数を持った人物が居るんだ!?!」

平賀の疑問は尤もだ。俺は、驚いている平賀に対し答える。

その間にも戦闘は続いているが、相手の剣や槍をかわしちよくちよく反撃する。

「今日から転校してきたんだよ。よろしく」

「よ、よろしく…じゃない!もっと上のクラスに行けたらどう!?!」

ノリツッコミをする平賀。だが、そんな暇はあるのだろうか?

指揮官として、代表として次の相手の策に備えるべきだろう。

「まあいいじゃないか。そんなことより後ろ見てみ？」  
「……？」

平賀の後ろには既に姫路が居る。近衛部隊は、俺が相手をしている。つまり、平賀の護衛は居ない。

「あ、あの……」  
「え？あつ、姫路さん。どうしたのAクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど……まさか!？」

そう。そのまさかなんだよ平賀くん。  
俺という存在に気付いた時には、部隊を纏めるなり撤退をすべきだったのさ。

まあ、この動揺を誘うつても坂本の想定通りなのだろう。

「えっと、Fクラスの姫路瑞希です。Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込めます。試験召喚です」

《Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点》

VS

《Dクラス 平賀源二 現代国語 129点》

まっ、こりゃ勝てるだろう。そう思いつつ召喚獣を操作しながら言う。

「姫路、頼んだぞ」

「は、はいっ！」

そう言い姫路は背丈の倍はある剣を振りかざし、平賀の召喚獣を一



撃で葬り去った。

ちなみに、俺は相手の3体の召喚獣を姫路が倒すより早く倒した。  
補習の仲間は増やしてあげた方がいいだろう？

第六問（後書き）

多少変な所があると思いますがご勘弁を

## 第七問

やあ、また俺なんだすまない。

今は姫路がDクラス代表を討ち取って終戦したところだ。周りはF・Dクラスの叫びが入り混じって耳触りに思うが、まあ仕方ないだろう。

『坂本雄二サマサマだな！』 『坂本万歳！』 『姫路さん愛してます！』 なんて、声が聞こえてくる。

お、俺だって近衛部隊5人相手に立ち回ったんだけどなあー（チラッ なんて思うけど、皆の頑張りがあったからこそ格上のDクラスに勝利出来たのだろう。）

みなから、褒められて照れている坂本の写真を隠れて撮りながら（ある人物に依頼されてるからな！）、状況が収まるのを待ってたんだが、吉井が先ほどの怨みなのか坂本を殺そうとしていたが返り討ちに遭っていた。やるなら、もっと殺気を隠すべきである。

命のやり取りはいいから、早く話し合いを済ませてもらいたいものだ。すると、丁度いいところに平賀が坂本たちに話しかけようとしていたから混ざることしよう。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて…それにあの転校生の實力も信じられん」

「あ、その、さっきはすみません」

「姫路、謝る必要はないだろ。不意打ち、闇討ちで殺れるならそれに越したことはない」

これは俺の信条だ。わざわざ、正面切って名乗り上げて戦う必要はないだろう。楽にやれるなら、その方法を取るだけだ。

試召戦争で、わざわざクラス名前を名乗るのが厄介だが。

「服部君の言うとおり。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ」

平賀が話を分かる奴で良かったと私は思うのですよ。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

たしかに、今は放課後だ。試召戦争の疲れもあるし、みんなも早く帰りたいだろう。だが、しかし！

「多分、その必要はないぞ。だよな？坂本」

「そうだな。その必要はない」

やはりそうか。隣で吉井が「え？なんで？」って言っている。

「俺たちはDクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「ダーリン。目標はAクラスのはずじゃないのか？」

代わりに俺が答える。

「どうせ敵に回すのならこんな回りくどいことせず一気に攻め込めばいいのに」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

どうやら、話が長くなりそうだ。先に平賀と話しておこう。

「FクラスはDクラスの設備には一切手を出すつもりはないだろう」「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか?」

「もちろん条件付きだな。後は任した坂本」

ただで設備を見逃すなんて甘い真似は坂本はしないだろう。条件の内容は、坂本に任すべきだろう。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したものじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本の言った『アレ』とは、Dクラスの窓の外にあるエアコンの室外機。だが、これはDクラスのものではない。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう?」

間違いなく悪い取引ではないな。だが、一瞬考えこむ平賀。

恐らく頷くだろうが、念には念を押してこの情報を使わせてもらうか。頼んだぞ康太。

「……………Fクラス使用者吉井明久への暴行撮影証拠動画」

「…ッ!」

あの反応は脈アリですな。素直に話を聞いてくれる方は素敵かも！  
って思ったりいー

「…分かった。だが、なぜそんなことを？」

隣で吉井が疑問を持った顔をしている。なぜAクラスが目標なのにBクラスの室外機を？って思っているのだろう。

「次のBクラス戦に必要な作戦なんぞでな」

「…そうか。ではこちらはありがたくその条件を飲ませてもらおう」「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てることを願ってるよ」「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

そっつい、平賀は礼を言っただけで去って行った。

「さて、皆！今日は御苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

と、坂本は締めくくる。その言葉を聞き、皆自分のクラスへと向かい始めた。

坂本が姫路に呼ばれ、それを少し離れたところから見守る吉井。

まあ、関係ないか。俺も帰りの支度をしよう。

現在下校中。帰る方向が一緒だからと、康太と秀吉と一緒に帰宅す

ることにした。

ちなみに、なぜ秀吉と呼んでいるのかと言うと、時折女子扱いされる秀吉を見て、「男で間違いないんだよね？」って聞いたら、「男子扱いしてくれるのはお主と雄二ぐらいなのじゃ！」って、凄く満面な笑みで言われてそこから仲が良くなった訳なんですよ。

「それにしても正吾。Dクラスとの勝負は本当に必要だったのかのう？」

と、秀吉が聞いてくる。康太もココココ頷いている。

「あくまでも推測だけだな。試召戦争に慣れさせるだとか、他のクラスにプレッシャーを与えたり、格上にも戦えるって事を思わせて士気を上げるとかの狙いがあるだろう。」

「それに、次のBクラス戦で必要な作戦があつたしな」

と、俺は話す。Fクラスの人間が、Dクラスの窓の外の室外機を壊すなんてあまりにも不自然すぎるしな。

「……………なぜ、Dクラスの設備を手に入れなかった？」

次に康太が聞いてくる。秀吉もココココ頷いている。

「俺たちの目的はAクラスなんだから？Dクラスの設備で満足して、試召戦争を反対してモチベーションを下げられても困るだろ。まったく、坂本はよく頭が回るな」

「……………雄二の考えを推測出来る正吾も同様」

「そっじゃな。ムツツリー二の言う通りじゃ」

間違ってるかもしれないけどな。と苦笑しながら告げる。

つと、そろそろ分かれ道みたいなので、挨拶してそれぞれの帰路へとつくのだった。

やっべわー。夕食の材料買い忘れたわ。ちよーありえねーわ。どうも、また俺なんだ。相変わらず口調が定まらないんだが、許してほしい。こういうキャラなんだ。

上記のとおりそういう状況なので、今商店街にいます。服装は制服のまま。

ちなみに目の前には、文月学園の女子生徒用の制服を着ている秀吉がいるんだぜ。いくら、演劇をやっているからと言って、こんなところまで練習をするなんて熱心である。人目の付くところでやれば、練習に身が入るとかいう理由かね？ だけど見た感じだが、今日よりも可愛らしい気がするんだが？ とりあえず、話しかけようか。

「よう、秀吉。さっきぶりだな。こんな所まで練習か。秀吉も夕飯の材料を買いに来たの？」

「…？」

反応が無い。ただの屍…ではないようだ。そう思い、少し距離を縮める。

「あれ？ 忘れちゃった？ 俺だよ俺」

しかし、よくよく見てみると若干だが眼つきが違つような。それに、



髪留めのピンも違うな。あれ、臭いも違うし骨格も違うような…？  
も、もじゃ…

「人違いでした！ごめんなさいいいいい！」

今、目の前にいる人物は秀吉の姉である木下優子だろう。なんて、失礼なことをしてしまったのだろうか。しかし、よく考えれば分かることであった。

「別にいいわよ。よく間違われるしね。それにしても、よく自分で気付いたわね？」

「よく見ると、眼つきが若干違うし、髪留めのピンも違ったからね」  
こんな俺と普通に話してくれるなんて、ええ人やあ〜。

「それに秀吉とは違う女の子っぽい可愛らしさがあったし」

と、満面の笑みで答える。これで完璧だろう。実際、その通りだし間違ったことは言っていないはずだ。

「かつ、かわいい!?!」

あれ？言葉を間違えたかな？なぜか腕を取られたんだけど？

「秀吉のお姉さん？その関節はそっちには曲がらないけど…」

どうやら、話が聞こえてないようだ。とりあえず関節を戻さないで。このぐらいなら、まだ大丈夫。

「し、ごめんね!?!ちょっと気が動転しちゃって…」

気が動転すると、あれほど綺麗に関節を極めれるのか。

「大丈夫。慣れてるから」

あれ？自分で言ってるって悲しい。初対面の女の子に関節極められるのが慣れてるってカミングアウトしたのだろうか。

それにしても、木下姉は顔が赤い。体調が悪いなら、話に付き合わせるのも悪い。もともと俺が話しかけたのが原因だしな。

「お姉さん？顔が赤いけど大丈夫？話に付き合わせちゃってごめんね。送って行こうか？」

目の前で体調を悪そうにしてたらそりゃ心配だろう。倒れないか心配だ。

「だ、大丈夫よ！？それに一人で帰れるから心配しないで!？」

凄いい剣幕で言われたら、引き下がるしかないだろう。それに何度も言うが初対面だ。

そんな相手に、家まで送らせるのも気が引けるし嫌だろう。それが男ならなおさら。

「そう。じゃあ気をつけてねお姉さん」

「あ、ありがとう。そ、それにアタシのことは優子でいいわ。それじゃ……」

と、言って脱兎のごとく駆けて行った優子（そう読んでもいいらしいので）。後で秀吉に連絡して無事に着いたか確認するか……さて、買い物しなきゃ

## 第七問（後書き）

色々ご都合主義がありますがあまり気にしないでほしいです。なんて言ってみたり

秀吉と優子が無理やり登場させました。

ここまで秀吉との会話が思い出せなかったので見逃してやってください

## 第八問

翌朝、時間ギリギリに登校してきたんだが案の定、吉井は船越先生の件を忘れてるみたいだ。

島田が楽しそうにその件を告げている。割と、どうでもいいことだったな。

今日は、昨日の戦争で減った点数を回復するためにテストを受けるらしい。またテストですか。適当にやりますかね。

「終わったか……」

これはテストの時間が終わったという意味である。テスト出来なかったわあー（笑）という意味じゃないんで勘違いしないでくれよな！ 周りを見渡すと机に突っ伏してるものが多数だ。しかし、そんな中でも元気なものもいるようだ。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

坂本の構造は一体どうなっているのだろうか。気になるが、後にし

よう。

食堂に行くらしいので混ぜてもらおう。弁当持参だが大丈夫だろう。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「俺もいいか？弁当持参だが」

「ああ、島田に服部か。別にかまわないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「さんきゅー」

「……………」（コクコク）

康太が頷いているのは下心だろう。それぐらいは分かる。吉井も俺と似たようなことを考えていたようだ。

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

恐ろしい勘である。女の勘（ ）って奴だろうか。分からん。話を換えようとしたのか吉井が話し始める。

「今日は警沢にソルトウォーターあたりを」

「あ、あの。皆さん…」

姫路が話しかけてくる。学食に一緒にいきたいのだろうか？

「うん？姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。お、お昼なんですけど…その、昨日の約束の…」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言い、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。吉井たち

は喜んでいようだが、俺は思わず震えてしまった。  
バッグの中からおぞましいオーラを感じる。話の流れから言つと、  
あのバッグの中には弁当が入ってるはずだ。  
つまり、弁当が危険なんだと。俺の本能がそう訴えかけてくる。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあゝ」

くっ！？どうする！？このままだと死人がでてもおかしくないぞ！？

「せっかくのご馳走じゃし、こんな教室でなく屋上でも行くかのう」  
「そうだね」

だが、俺は弁当を持参している。難を逃れれるだろう。それに俺の  
勘違いかもしれない。

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？雄二はどこかに行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

坂本、島田は助かる確率が高いな。幸運なやつらだ。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

姫路弁当の考察をしてる間に、話は進んでいく。どつやら、もう屋  
上へ行くようだ。

それに付いていき、屋上へ辿り着く。

「天気が良くてなによりじゃ」  
「そうですねー」

秀吉の笑顔が眩しい。これから死地へ赴くからだろうか。  
だが、まだ決まったわけじゃない。中身が上手すぎて、逆に禍々しいオーラが出てしまっているのかな。  
姫路が持ってきたというビニールシートの上へ腰を落とす。

「あの、あんまり自信はないんですけど…」  
『おおっ！』

俺、以外一斉に歓声を上げる。ふむ、見た目はいいな。やはり、思い違いだったのか？  
弁当持参は失敗だったか

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」  
「……………（ヒョイ）」  
「あつ、ずるいぞムツツリーニっ」

素早い動きで海老フライをつまみとり口へ運ぶ康太。だが

バタン  
ガタガタガタガタ

豪快に頭から倒れ、小刻みに震えだした。やはり、毒だったか！？  
早く解毒しなければ！  
俺は素早く解毒剤を康太に飲ませるが、状態は危ない。吉井を秀吉は、お互いに顔を見合わせている。

「……………（ムクリ）」

康太が起き上がる。症状から見てそんなすぐ起き上がれないと思うんだが……

「……………（グッ）」

もういいっ！休めっ！休め康太っ……！恐らく姫路を気遣ったのだから……

「あ、お口にあいましたか？良かったですっ」

康太っ……。お前の遺言は伝わったみたいだぜ……だから、もう心配するな……

隣では秀吉と吉井がアイコタンクトで会話をしているようだ。

どうやら、そろそろ話が終わりそうだ。だが、その時

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

一生贄（坂本）が登場した。

「あっ、雄二」

吉井が止めようとしていたが、それは遅かった。既に卵焼きを口に放り込み、

バク　　バタン　　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をブチ撒けて倒れた。康太の二の舞である。

「坂本！？ちょっと、どうしたの！？」



島田が声を掛けながら坂本に駆け寄る。

俺は確信した。これは本物であると。

坂本は倒れたまま吉井の方をじっと見て何かを訴えかけていた。

恐らく『毒を盛ったな』と言いたいのだろう。

だが、しかしここまで簡単に人を殺れるなんてどんな材料を使っているのだろうか。

いつの間にかだが、島田が居なくなっている。吉井が対処したのだろうか。

隣では坂本・吉井・秀吉でアイコンタクトをしていたのだが、俺に処理させようという案が出ているらしいので参加することにしよう。

(おい、俺は弁当持参だからパスな)

(!?)

三人が一瞬驚いた顔をする。なぜアイコンタクトを見破られたのか気になるのだろう。

(隣で観察してたからな。それに康太も使えるんだろう? なら俺にも分かる)

(…チツ。ならそうやって処理する?)

舌打ちしやがった。簡単に仲間を売るつもりだったんだな。

「あつ！ 姫路さん。あれはなんだ！」

吉井が叫ぶ。こんな簡単な事に引つかからない…いや、引つかかったな。

その際に吉井が坂本を生贄に弁当を処理する。だが、これはいい判

断だろう。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

坂本も報われない役だったな。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん、特に雄二が『美味しい美味しい』ってすごい勢いで

凄い勢いで流し込んだの間違いだろう。

礼を言う坂本の目が虚ろだ。解毒剤を飲ませてあげよう。

横では吉井が『それじゃ、また作ってきますね』という展開にならないよう奮闘しているみたいだ。

だが、

「あ、そうでした」

嫌な予感がする。

「ん？どうしたの？」

「実はですね」

「ごっそそ靴を探る。」

「デザートがあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ!？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

解毒剤を飲んだ坂本が命懸けで作戦を止めにかかる。どつやら、三

人で作戦タイムに入ったようだ。

結果、秀吉が頂くようだ。

姫路が立ち上がる。どうやらスプーンを忘れたようだ。

「では、この間に頂いておくとするかの」

秀吉、アンタ男やな…

「……すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

坂本、吉井は俯きがちにそう呟く。そんな彼らに秀吉はフツと笑みを浮かべ言う。

「別に死ぬわけではない。そう気にするでない」

「そ、それもそうだね！」

「ああ！秀吉！頼んだぞ！」

「解毒剤はあるから、安心して行ってこい」

忘れてるかもしれないが、康太は油断出来ない状態だけどな。そんな事言ったら決意が鈍ってしまうだろう。

「うむ。任せておけ。頂きます」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ意外と普通じゃとゴばあっ！」

素晴らしい反応を有難う秀吉。早く解毒剤を飲ませなければ。その秀吉の反応を見ていた吉井が坂本に謝っていた。

姫路に毒物は食べれないって言えばこんな犠牲は出なかったと思うんだけどな？

俺が食べる訳じゃなかったから言わないが。

「そういえば、坂本、次の目標だけど」

「ん？次の試召戦争のか？」

「うん」

激しい昼食の時間を終え、皆でお茶を沢山飲んでいた。お茶は殺菌成分が含まれているらしいが、あれに効くかは分からない。

ちなみに、あの被害者三人からは解毒剤をありがとうと感謝された。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

そうだろう。わざわざDクラスの設備を奪わず、室外機の破壊を条件に和平交渉で終わらせたのだから。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

そういえば、これは一部しか知らないんだっけか。

「正直に言おう」

坂本が神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

まさかの降伏宣言である。だが、無理もない。Aクラス40人はBクラスよりちよつと点数が上ぐらいだが、トップ10は化物らしいからな。

しかし、どうせ策はあるのだろう。わざわざ遠まわしに言うとは面倒くさいやつである。

「それじゃウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはないさ」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

島田のセリフを引き継ぐように吉井が間に入る。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う」

Bクラス戦に勝ち、Dクラス戦と同様和平交渉に持ち込むつもりか。勝たなきゃ意味ないが。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備がどうなるか知ってるな？」

「え？も、もちろん！」

「どうやら知らないようだ。」

「姫路が吉井に助け船を出す。負けた場合は設備のランクを落とされる。BならC、CならDという風に。」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「吉井はある意味天才なのではないか？」

「上位クラスが負けた場合は、負けたクラスの設備と入れ替えられる。」

「そのシステムを利用して交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込ませる。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからな。うまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね！」

「この状況になれば、Aクラスは2連戦は避けられない。それに体力にも影響が出るだろうしな。」

「何よりAクラスにとって利益が無い。モチベーションも保てないだろう。」

「だが、」

「それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じやが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実ではあるのは」

たしかじゃからな。それに

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路と正吾がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

FクラスがDクラスに勝つたとなると、その勝ち方に注目が集まるだろう。

つまり、姫路と俺に対する対策は練られているだろう。俺に関しては現代国語のみが高い転校生って認識されてる可能性もあるが。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

そう自信満々に語る坂本。足下を掬われなければいいがな。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる。」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったらBクラスに行つて宣戦布告して来い」

これは情報集めのチャンスだな。ぜひ吉井に行つてもらいたい。

坂本と吉井は心理戦アリじゃんけんんで使者を決めるらしいがどうせ、吉井が負けるだろう。

案の定、吉井が負けていた。

こうして、自称365度どこから見ても美少年（笑）の吉井が使者となった。

実質5度だよな。うん。

テスト漬けの午後が終わり、吉井がボコボコにされて教室に戻ってきた。

俺と康太は、天井に張り付いて一部始終を撮影させてもらった。俺がホクホク顔だったのは言うまでもないだろう。そういえば、姫路が妙に拳動不審だったが気にしなくていいだろう。



## 第八問（後書き）

次回から、Bクラス戦ですー  
主人公があまり会話に交じってない件

## 第九問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つ坂本が机に手を置き、皆の方を向いている。

午後からはBクラスとの試召戦争だ。クラスのモチベーションは高い。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。そのため、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に取ってもらおう。野郎ども、きつちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

重要な所で負けるわけにはいかない。ただでさえ戦力差があるしな。姫路の投入は打倒だろう。

『うおおーっ！』

前線部隊の士気は最高潮である。姫路と戦えることがよっぽど嬉しいのか。

ちなみに、渡り廊下戦には40名投下するみたいだ。よっぽどのことがない限り大丈夫だろう。俺も後方から支援するし。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴る。Bクラス戦開始の合図だ。

坂本の号令が響き渡る。野郎どもは勢いよく駆けだしていった。

今回のこちらの主武器は数学だ。Bクラスは比較的文系が多いらしいからだ。他にも、英語と物理の先生がいるみたいだ。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

どこからともなく聞こえてくる声。正面にはBクラスメンバーが十名程度がいた。

「生かして帰すなーっ！」

物騒な言葉である。うちのクラスは血気盛んみたいだ。Dクラス戦で分かったことだが。

《Bクラス 野中長男 総合 1943点》  
《Bクラス 金田一祐子 数学 159点》  
《Bクラス 里井真由子 物理 152点》

…予想通りとはいえ、やっぱり戦力差あるなー。圧倒的な実力差に第一陣がやられていく。フオーしないとまずいかと思っていると

「お、遅れ、まし、た…。ごめ、んな、さい…」

息を切らした姫路がやってきた。姫路が来れば大丈夫だろう。

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。さすがに、下調べをしてきたか。警戒心がこちらにも伝わってくる。

吉井と姫路が話しこんでいる。  
話が終わったのか、トタトタ戦場に向かう姫路。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます」

「律子、私も手伝う！」

早速、姫路に襲いかかるBクラス女子二人。だが、たった二人で止めれるなんて思っていたのならそれは愚行だろう。なぜなら、

《Fクラス 姫路瑞希 数学 412点》

400点オーバーで腕輪持ちだからだ。腕輪つてのは、400点を超えた教科で使えるらしい。その腕輪は特殊能力を持っているので、2人では止められないだろう。

予想通り、相手二人はその腕輪の効果でやられていた。効果は『熱線』といったところか？

「なっ！そんなバカな!？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り八人は驚愕の表情が浮かぶ。

「み、皆さん、頑張ってください！」

姫路の檄が飛ぶ。これは指示とは言えないが、

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

野郎どもには十分であろう。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

そんな指示が聞こえてくる。まあ、この状況では的確な判断だろう。このまま、相手を下からせれば策は成功と言えるだろう。そんな事を考えていると、秀吉と吉井が話し合っている。どうやらこちらに来るようだ。

「姫路、正吾、ワシらは教室に戻っていいかのう？」

恐らく、Bクラス代表の根本恭二の事を警戒してのことだろう。カニンング常連やら、ケンカには刃物がデフォルトなど、目的のためには手段を選ばないだとか。

「ここには姫路を残せば大丈夫だろう。俺も一緒に戻るよ」

言っでなかったが、副指揮官的なポジションにいるんだぜ俺。それに教室でなんか起きてそんな予感がするし。

「ホント！？服部君がいれば助かるよ」

「そうと決まれば、早く向かうか。」

「では、頼むぞい。姫路」

「は、はいっ！」

「はぁ…予想通りか…」

今現在、俺・吉井・秀吉は教室の扉の隙間から中の状況を覗いている。

おそらく、Bクラスの連中だろう。卓袱台や筆記用具を破壊している。

「止めなくてもいいの！？服部君!？」

「そうじゃぞ正吾!？」

どうやら、二人とも冷静さを欠いてるようだ。

「まあ落ち着け。相手は4人で人数的に不利だ。」

4人程度なら俺は大丈夫だが、吉井と秀吉の実力が分からないから下手に動けないしな。

「それはそうだけど…」

「あの根本の手下だ。まさかとは思うが、脅しに使う刃物ぐらい持たせていても不思議じゃない」

「ま、まさかねえ…」

「まっ、用心に越したことはない。ここは静観が得策だろ。」

2人はしぶしぶ納得してくれたようだ。

破壊活動は終わったらしく教室からそそくさ逃げて行った。俺たちは身を隠しているからばれてないようだ。

しばらくすると坂本と近衛部隊が帰還してきた。この惨状を見たが、表情を見る限りあまり気にしていないようだ。

それに、どうやらBクラスと協定を結んだようだ。内容は『4時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為は禁止』だそうだ。

吉井と秀吉は話を聞き終わり戦場を戻るようだ。俺は教室に残ると言い、二人を見送る。

「坂本」

「どうした？」

「その協定は、いかにもきな臭くないか？」

「…お前もそう思うか？」

「根本がこの教室を荒らすだけのために、こちら有利とも言えなくはない協定を結ぶとは思えないが」

「そうだろうな。根本の本当の狙いは何だ？」

「Fクラスが有利の理由は、姫路の体力だろう？つまり…」

ここまで言えば坂本は分かるだろう。

「…ッ！卓袱台や筆記用具の破壊は困か」

「恐らくな。協定では午後4時～午前9時までは試召戦争に関わる行為は一切禁止なんだろ？つまり、補給試験やらは出来ないはずだ。なのに奴らは、筆記用具や卓袱台を壊した」

「そちらに意識を向けさせ、なんらかの姫路の弱みを握ったことを俺たちFクラスに悟らせないと」

推測だが、根本の考えそうなことである。姫路の性格的にも俺たちに打ち明けては来ないだろう。

「あくまで推測だけだな。それに本当だったとしても、その弱みを使うのは明日以降だろう」

わざわざ手に入れた切り札を今まだ行われているであろう戦闘で使う訳ないだろう。もうすぐ4時になり協定の内容である試召戦争に関わる一切のことができないのだから。

「クソツ！してやられたわけか」

「そうなるな。その事を考慮して明日の策も考えた方がいいな。頼んだよ代表サマ」  
「任せろ」

午後4時になり、協定通り一時休戦になり皆戻ってきた。吉井がボコボコにされた跡があるが、島田にやられたのだろう。返り血浴びてるし。

戦況は、Bクラス前の教室まで追い込めたようだ。被害は大きいようだが。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」  
「…まあな」

一瞬、坂本が言い淀んだのは先ほど俺と話した内容が頭に残ってい



るからだろう。

「……………(トントン)」

「ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

全く出番が無かった康太が現れる。情報収集をしていたのだろう。関係ないがいつの間に坂本は、呼び方をムツツリーニ変えたのだろうか。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……………(コクリ)」

どうやら、Cクラスが試召戦争の用意をしているようだ。おそらく、

「漁夫の利を狙うつもりか。嫌らしい連中だな」

それしかないだろう。

「雄二どうするの？」

「んー、そつだな」

ちらりと時計を見る。今は4時30分。

「Cクラスと協定を結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、と言って脅かせば俺達を攻める気はなくなるだろう」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

と、吉井が言う。だが、しかし待ってほしい。

「…………… Bクラス代表とCクラス代表は付き合っている」  
『!?!?』

「つまり、この情報は意図的に作られたものかもしれない。って言いたいんだよな康太？」

「…………… (コクリ)」

これも、協定を結んだ相手の利点か。代表同士が付き合ってるなら、試召戦争外の付き合いって言ってしまえば、何も言えなくなってしまう。

「なるほどな。だが、敢えてその情報に踊らされようじゃないか」

「正気なの雄二!?!?」

「俺も坂本に同意だな。敢えて、相手の思惑通りに乗った方がいい」

「どうしてじゃ？」

俺・坂本以外の5人は首を傾げている。

「どうやら、根本は俺達を見下してるようだな。協定の時もつぞつたらしかつたんだよ」

「そこにつけこむんだよ。『Fクラスは、俺の思い通りに動いてる』って思わせる為にな。ここで下手に警戒すると、いくら根本と言えど不審に思うだろう」

「その通りだ。根本の思惑通りに動くのは癪だが我慢してくれ」

「そんな奴の天狗っ鼻を押し折るのも楽しいだろうしな？坂本」

「ああ」

と、お互い黒い笑みでニヤリとする。周りは若干引いてるが気にしない。

「ということだ。今から向かうぞ。あと、秀吉は教室に残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると明日の作戦に支障が出るんでな」

若干、人数が少ないだろうが仕方ないだろう。近くに居た須川を引きずりこめばいいか。

こうして、7人という少数精鋭で向かった。精鋭と言えるか分からないが。

少し歩きCクラスに辿り着く。

「Fクラスの坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、坂本がCクラスに告げる。登場の仕方が悪役っぽいつすよ坂本さん。

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、いかにも気の強そうな女子が出てきた。名前は小山だったはず。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

その言葉を聞き、小山は嫌な笑みを浮かべる。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

小山は振り返り、教室の奥に居る奴らに声を掛けた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

奥からニヤニヤした根本がこちらにやってくる。今にも『掛かったな！バカども！』って言いそうである。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言ってる」  
「先に協定を破ったのはソッチだからな？これは、お互い様、だよな！」

根本が告げると同時に取り巻きが動き出す。その背後には、小柄な数学の長谷川先生が隠されていた。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を「させるか、Fクラス須川が受けたっ！」」

須川っ…！お前、今最高に輝いているぜっ…！  
ちなみに、今までの俺たちの反応は全部演技である。須川は、それを知って盾に名乗り出たのである。  
須川は「俺の犠牲でFクラスが勝てる確率が上がるんだろう？なら、任せてくれ」と、Cクラスへの途中で言っていた。

「お前ら！ここは撤退するぞ！」

坂本が叫ぶ。

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後からの根本の指示と複数の足音。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

廊下を走っていると思姫路が遅れた。撤退戦って分かってたから、姫路は秀吉と共に待機させておくべきだったか。だが、坂本に万が一を考えると姫路の戦力は必須だしな。

「あ、あの、さ、先に……行って、ください……」

ここで姫路を失うのはまずいな……弱みを握られてる可能性もあるが、あくまでも可能性だ。ここで見捨てるのは明日の戦いに大いに響く。

「雄二！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ！」

このクラスにはなんて男らしい奴が多いんだろうか。

「よ、吉井君、私のことは、気に、しないで」

「……わかった。ここはお前に任せる」

さすが坂本。感情に流されず、やるべきことを把握している。

「……………（ピタッ）」

「いや、ムツツリーニも残ってほしい。明日はムツツリーニが鍵を握るから」

そうだな。俺でも遂行出来るが、康太の方が確実性は高い。

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？」

「…頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

殿は二人に任せ、俺たちは走り出す…が、俺も少し離れたところで止まる。

「おい、服部！どうした!？」

「いや、明日の為にちよっとでも相手の戦力を削ろうかなあ…っと」

「…出来るのか？」

「ここで、吉井・島田を失うのも明日に響くだろうしね」

「…頼んだぞ」

「任されたよ」

そう言い、俺は別行動を取る。目指すは、殿2人の元だな。

さて、状況は…っと。

ふむ、4 vs 2か。だが、島田は数学は得意だし吉井は観察処分者だ。生き残ってるみたいだな。

俺は今、廊下の外側の窓に張り付いている。Bクラスの追手の背後に陣取ってるから、吉井達に見えてもBクラスの追手には見えないだろう。吉井・島田は一瞬驚いてたが、静かにするようジエスチャ

ーを送ると分かってくれたようだ。

吉井は召喚獣を操りながら、こちらにアイコンタクトで言葉を送る。

『どうしてそんな所に！？雄二達は！？』

『坂本たちは恐らく逃げ切った。ここにいる理由は、明日の為に相手の戦力を削りにきた』

『なら、服部君が殿でも良かったよね！？』

『流石に、上位クラス4人のフルは厳しいがお前たちが点数を削ってくれると思ってたしな。そこを突けば殺れる』

『信頼してくれてたんだね』

『当たり前だろう？じゃなきゃ、こんな無茶なことはしないさアキくん』

そう会話すると吉井が感動したかのような表情になるが、少し顔が引き曇ってる。この呼ばれ方に抵抗があるのか。

『じゃ、何かしら注意引いてくれ』

『分かった！任せて！』

アイコンタクトマジ便利。しかし、召喚獣を動かしつつ、島田達とも会話し、俺ともアイコンタクトする吉井は意外と器用なのかもな。

「島田さんアレを！」

そっとう吉井の視線の先には消火器がある。まさか…

「了解！」

それを抱え上げ、安全栓を引き抜き…？

「……………」

使わないのか？

「は、早く使って！」

「うーん。どうしようかな？」

何やら始まった。面倒だから消火器撒き散らすまでスルーだな。吉井の叫び声が聞こえる。『ウチのことを愛してる！』なんて、聞こえないな。うん。

叫びが終わり、ブシャアツ！と聞こえる。見れば煙が立ってる。これはチャンスですな。

窓をそーっと開けてつと、

「Fクラス服部。そのBクラス4人に数学で挑みます」

『えっ！？』

煙と共に現れる刺客つて、なんかいいよね！

相手の視覚は見えないだろうけど、俺には見えるんだよね。さて、お仕事仕事。

「くっ、見えないわ！」

「卑怯者め！」

いや、自覚はあるがBクラスには言われたくない。

「悪いな。けど、これでオサラバだ」

と決め台詞と共に煙は晴れていく。ふっ、決まったぜ……

召喚フィールドには、中央には俺の召喚獣、周りには首とその身体



が4体倒れていた。

《Fクラス 服部正吾 数学 312点》

「なんで、姫路クラスがもう一人居るんだ!？」

「聞いてわよ!？点数が良いのは現国だけじゃないの!？」

いや、言っていないし。勝手にそう思ったたそっちが悪いよね。

『戦死者は補習!』

西村先生がやってきた。相変わらずどこに潜んでいるのだろうか。考えても仕方ないか。そう思い俺は、吉井と島田に声を掛け教室に戻るのだった。

「あー、疲れた!」

「よ、吉井君!無事だったんですね!」

教室に戻ると、姫路が吉井に駆け寄っていった。隣の島田の機嫌が悪いが俺には関係ない。

「……………お疲れ」

「おう」

康太が近寄ってくる。会話が短いが十分である。

「お。戻ったか。お疲れさん。殺れたか？」

「無事じゃったようじゃな」

「おう。不意打ちで、4人の首頂戴しといた」

「犠牲1名に、戦果4名か：予想以上の出来だな」

須川の犠牲を俺達は忘れないっ…！

「さて、お前ら」

「ん？」

この場にいる全員を見渡して坂本が言う。と言っても、少数だが。

「分かっているとは思うが、相手の思惑に乗ったからにはCクラスも敵だ。同盟戦が無い以上、は連戦になるだろう。Bクラス直後にCクラス戦はキツイ」

そうだろう。ただでさえ、戦力的に劣っているのに削られた状態で、格上と戦うのだから。

「だが、心配するな」

坂本は野性味たっぷりの活き活きとした顔で告げる。これは写真にしたら高く売れる。

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えはある」  
「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はそれで解散。続きは明日へと持ち越しになったでござるよ。

## 第九問（後書き）

個人的には凄く長くなったと思います

**第十問（前書き）**

お久しぶりです

## 第十問

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺たちに坂本はそう告げた。  
だが、まだ開戦時刻前である。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスのほうだ」

「あ、なるほど。それでなににするの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言い坂本がカバンからおもむろにうちの学校の女子の制服を取りだす。なぜコイツが持っているのか問い詰めたい。

「それは、別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

男として見られたいなら断るべきだがな。秀吉なら仕方ないのかも  
しれない。  
女子の制服を着たら、まるで双子の姉の木下優子とそっくりさんになるな。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」  
なるほど。Aクラス所属の木下優子に化けて圧力を掛けるのか。

「と、いう訳で用意してくれ」

「う、うむ……」

坂本から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

隣で康太が指が擦り切れてるのではないかと思うぐらいの早さでシヤッターを切っている。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

コイツは自分の影響力を分かってないようだな。

「分からん。時間もないからCクラス行くか」

「うむ」

坂本が秀吉を連れて教室から出ていく。吉井と康太も一緒に行くみたいだ。

状況は音声のみだが康太から送られてくるから、木下優子が何処にいるか確認しないと。作戦実行中に本物がCクラスに来てしまう可能性も無くは無いからな。

そう考え、俺は別行動を取ることにした。

俺は現在、Aクラスの窓の外に居る。予め調べといた、いざという

時の逃走ルートが役に立ったな。

どうやら、ターゲットは教室木下優子にいるみたいだ。ここで足止めをしないとな。

コンコン

「!?!」

窓際に居た生徒達が驚愕の表情を浮かべている。

「おはようございます。木下優子さんをお呼びでもらえませんか？」

「……………(コクリ)」

なるべく不信感を与えないように笑顔で話さないと。対応してくれた彼女はすぐに呼んでくれたようだ。

「昨日ぶり。昨日はゴメンね？」

「別に気にしてないけど…なんで、窓から来たのかしら？」

当然のごとく突っ込まれた。まあ、当たり前だよな！

「今、Fクラスは試召戦争中じゃない？Bクラスの奴らに見つからないように行動するには普通の道じゃ見つかったっちゃうしね」

「はあ…理由は分かったわ…それで、他に何か用があるのかしら？」

もう少しこの件で時間を稼げると思ったが…と、そこに

「優子？窓から登場してきた彼は何者かな？」

緑髪で短髪、いかにもボーイッシュという言葉が似合う女の子が現



れた。

「Fクラスの服部正吾です」

「君が噂の転校生の服部君？」

「…恐らくそう思いますが」

この学校に服部が名字の奴はいなかったはず。

「んー。なんか口調堅いね？気のせいかな？」

「いや、ちよつと緊張しててね。それと貴女の名前は？」

「そういえば。それじゃあ改めて自己紹介させてもらうね。Aクラス  
の工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から  
78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリーム  
だよ」

中々奇抜な自己紹介である。

だが、紳士として特技のパンチラには触れるべきではないよな。

「ほう。工藤さん、その特技を今ここで実践出来ない？」

無理でした。

やっぱ、俺も健全な男子高校生だから反応しちゃうよね！

「ふふつ。大胆だね服部君は？」

まさか、初対面の女の子とこんな会話を出来るとは思わなかったぜ…  
あと一步でパンチラ（本人公認）観賞出来るかもしれないツ…！！

「ふつ…それが取り柄だから…って、優子ちゃんちよつと目付きが  
鋭すぎるかなって思ったり」

優子ちゃんの目付きは人を射殺することができるのではないか？

「アタシを置いてけぼりにして、なんて会話してるのよ…」

「ごめんね？けど、男として反応せざるを得ない内容だったからさ」

そんな内容をチョイスする工藤さんのセンスに脱帽である。

「優子ごめんね？服部君は優子のだと知らずに」

「ふえ！？そ、そんなんじゃないわよっ！？」

何の話だろうか。それより、Fクラスの作戦は成功したみたいだ。そろそろ帰還するべきだろう。

「お二人さん、お話の最中に悪いんだけどさ。俺がここに来た理由なんだけど」

「「なんだけど？」」

二人がハモって聞き返すと同時に

ガラッ！

『CクラスはAクラスにし試召戦争を挑むわ！私たちをブタ呼ばわりしたこと後悔なさい！』

Cクラス代表の小山とお連れがAクラスに殴りこみに来た。ほんと、ヒステリックだな。

「Cクラス戦頑張つて！それとゴメン優子ちゃん。って、伝えたかったんだよ。それじゃ」

Aクラスの皆の視線が小山に行ってるときに、俺は早口で告げそのまま窓から脱出するのであった。

今、現在時刻は9時過ぎ。試召戦争が始まってる時間だ。俺は教室で坂本と護衛達と待機している。

「なあ、坂本」

「なんだ？」

「俺も前線に参加した方が良かったんじゃないか？」

昨日話した内容が現実だったら、姫路はこの戦争では使い物にならないはずだし。

「たしかにそうなんだがな。さっき姫路に聞いたところ大丈夫なよ  
うだ」

「ウソだろ」  
「ああ。明らかに挙動不審だった」

だろうな。おそらく姫路はウソをつける性格ではないだろう。

「なら、尚更行った方がいいだろ」

「しかしな、当日に作戦変更を告げたらFクラス内で不安が出るだ

るう？なぜ、ウチのEースでもある姫路を前線から外すのかつてな  
「そうか。姫路がいるだけでも野郎どもの士気は上がる一方つてのも  
あるし」

だが、そんなことでBクラスを抑えられるわけがない。

「どうせ、他に考えがあるんだろ」

「策とは言えないが…あるにはある」

そんな事を言っている坂本の顔は僅かに笑っている。なにかおかしい  
場面あったか？

と、そこで教室のドアが開く。敵襲か？

「雄二っ！」

そこに現れたのは、クラスメートの吉井明久だった。  
なるほど、確かに策とは言い難いな。

「根本君の制服が欲しいんだっ！」

開口一番何言っただコイツ。事情が分からない人が聞けば間違い  
なく変態扱いされるだろう。

現に、事情が分かる俺でさえ変態扱いしそうなんだから。

そんな事を思ってる俺をしり目に、坂本と吉井は話を進める。坂本  
が何時になく真面目な顔で吉井に話しかける。その表情いただきで  
す。これは高く売れる！

考え込む吉井を前に、坂本が立ち上がる。どうやら、Dクラスに室  
外機を壊すように指示を出しに行くみたいだ。そして、坂本がこち  
らに顔を向ける。

「服部。お前に頼みたいことがある」

「前線に行つて、Bクラスを教室内に留ませろつてか？任せとけ」  
「頼んだぞ」

そう言い、護衛を引き連れ教室を後にする坂本。  
シリアスっぽいから、俺もその雰囲気を引き継ぐ。

「アキちゃん…」

「シリアスが台無しだよっ！？それにアキちゃんって何！？」

相変わらず鋭い反応を見せてくれる吉井。

「難しく考えるなよ。お前ならではの強みつてのがあるだろ？」

「……あ」

何か思いついたみたいだな。もう言うことは無い。

「それじゃ、Bクラスで会おうぜ。頑張れよ明久」

「…！正吾もね！」

言いたいことを言つて俺も前線へ向かうために教室を出る。アイツ  
ならやれるだろうさ…

なんか、死亡フラグっぽいけど大丈夫だよな？

よう。何度もシーンが飛んですまない。俺が今いるのはBクラス前だ。

周りには、Fクラスの戦死者以外ほぼ全員居るぜ。姫路が戦闘に参加出来ないからFクラス本隊まで出勤せざるを得ない状況だ。

つまり、教室突破されたら総大将の首はすぐ取られるって見て間違いないだろう。

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって。あつぐるしいことこの上ないっての』

Bクラスの教室内からそんな声が聞こえてくる。この声は恐らく根本だろう。

そんなセリフに坂本も軽口で返している。

『…さつきからドンドンと壁がうるせえな。何かやってるのか？』

「さあな。人望の無いお前にたいしての嫌がらせじゃないか？」

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

「……体勢を立て直す！（……）一旦下がるぞ！」

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

Bクラス内から結構な人数が、追撃を試みようとして引つ張られてきている。視線は、みな坂本に向いている。

だが、坂本は不敵に微笑む。

「あとは任せたぞ、明久」

そのセリフのすぐあと、吉井の叫び声が聞こえる。それと同時に『ドゴォ！』なんて豪快な音も聞こえてくる。

壁をぶつ壊すなんてヤルネエ！

俺もやることやらないとね。俺は吉井達に気を取られてるBクラスに気付かれないよう静かに告げる。

「Fクラス服部正吾、現国で範囲内に居るBクラスの人達に勝負を挑む」

それと同時に近くに居る棒立ちの召喚獣達の首を吹き飛ばす。

闇討ち不意打ち騙し打ちこそ勝利への近道さ！そういえば、俺って正々堂々戦ってないよね！

『なんで、あいつがこっちのドアに!?!』

『クソツ！やられた!』

いい具合にパニックってるな。誰かを犠牲にこの場を離脱して根本を助けに行けばいいのに。

まっ、そんな暇与えないが。

Bクラス内では、吉井達が根本に勝負を挑もうとしたが阻まれた。

『ははっ！驚かせやがって!?!2か所同時に奇襲なんてな!だが、それも失敗だ。残念だったな!』

取り繕うように笑う根本。確かに、この奇襲は失敗である。吉井達は既に近衛部隊に囲まれ、俺の方も順調に首を刈り取っていたが、複数人が守りに徹され時間稼ぎされると厳しい。

だが、こんな二重の奇襲はただ相手の兵をおびき寄せる罠にすぎない。

本命は

ダン、ダンッ！

「…………… Fクラス、土屋康太」

「キ、キサマ……………！」

「…………… Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

こっちななのだから。三重の奇襲とか中々エグイねえ。そのうち二か所は、本来はあり得ない場所からとか正に奇襲だね。

《 Fクラス 土屋康太 保健体育 441点》

V S

《 Bクラス 根本恭二 保健体育 203点》

康太の召喚獣は手にした小太刀で一閃し、一撃で根本を葬り去ったとき。

みんな、お疲れ！



## 第十一話

よう俺だ。

吉井が壁を壊したり、康太が窓から侵入したりという出来事があったけどBクラスに勝利した。

さて、この後の出来事が楽しみである。

「さて、嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込む根本。あんなに強気だったのが見る影もない。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんこともない」

その坂本の言葉に、周りはざわめく。

「落ち着け。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラス。そうだろう？」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが目標を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉でFクラスの皆は納得したかのような表情になった。

「……………条件はなんだ」

根本が問う。コイツ、負けたのになんで態度でかいの？

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

率直な物言いである。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の昼に言っていた、取引材料のことか。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば、設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があると伝えるだけだ」

「…それだけでいいのか？」

だから、なぜ下手に出ないのか。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら俺は見逃そう」

そう言い、坂本が取りだしたのは女子の制服。こうすれば、吉井の願いも叶えられるって訳だ。

「ば、バカなことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……！」  
必死すぎだろ……。言うとおりにすれば、まだBクラス内でもまだ扱いはマシになるだろうに。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう!』

『任せて!必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

Bクラスからの声援。当然の態度だろ。ここで、『それで教室を守れるなら…喜んでやらせてもらおう』なんて、言つとけばいいものをな。

「んじゃ、決定だな」

「くっ!よ、寄るな!変態くふう!」

「とりあえず黙らしておきました」

「お、おう。ありがとう」

変わり身早いな。坂本も驚いてるぞ。

それは置いといて、Fクラスの教室を荒らした奴を探そうか。そうは言っても、RECしたから分かってるが。

思い立ったら、すぐ行動しないとね!ちようどよく犯人4人固まったところにいるし。

「そこの4人いいかな?」

「?」

疑問顔でこちらに振り向く4人。そのうち1人の顎に手を添えて告げる。

「君達が教室を荒らしてくれた4人だよな?いや、別に謝ってくれなくてもいいんだ。けど、それなりの代償がくるかもしれないって覚悟はあるよね?こちらには証拠動画あるんだ。俺は別に流す気はないけど、不可抗力で流出しちゃうかもしれないじゃない?それだけは覚えといてほしいな」

そう呟いて、その4人から離れる。  
この後は根本の女装撮影会があるからな。本人の為にも最高傑作に  
仕上げてあげないと。

『次の題材は服部君が主人公で決まりね…』

『ドSな表情の服部君…これは3日困らないわ』

『私にもしてほしいイイイ！』

なんて聞こえてくるが、幻聴に違いない。  
さっさと、撮影会始めるか。

Bクラス戦を終え、根本の撮影会も終わり、そして点数補給を終え  
た2日後。

いよいよAクラス戦だ。そのAクラス戦に向けた作戦の説明を受け  
ていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていた  
にも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったの  
ことだ。感謝している」

雄二が壇上で、素直に礼を言っていた。ちなみに、Bクラス戦を終

えてから下の名前で呼ぶ合つようになったのをここに記す。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる俺の気持ちだ」

何か悟りでも開けたのか?清々しいぜ…

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないって現実を教師どもに見せつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえ!』

相変わらず人を焚きつけるのが上手いな。

「皆ありがとつ。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思う」

クラス内はざわめく。当然の反応だ。

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン机を叩き静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。

クラスを賭けた戦いだから代表同士が行うのは当然だろう。

だが、雄二が学年主席に勝てる策はなんだ？そう考えていると

「バカの雄二が勝てる訳があああ！？」

吉井がその疑問を解こうと口にしたらカッターを投げられていた。

『次は耳だ』なんて言っている坂本。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

そうだろう。分かってたなら明久にカッターを投げなくてもよかつたんじゃないか？

「だが、B・Dクラス戦もそうだっただろう？まともによりあえば俺達は勝ち目はなかった。」

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

ここまでFクラスを引つ張ってきた雄二だ。Fクラス内でそれを否定する奴は一人を除きいないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童と言われた力を見せてやる」

『おおおーっ！！』

この盛り上がりを挫くなんて野暮だろう。

坂本が具体的な作戦を言っているが、まあ一騎打ちなんだしやるのは坂本だ。真面目に聞かなくてもいいだろ。

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その…仲がいいんですか？」

その通りである。意外なことにこれは知られていない事実だ。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員狙えっ！」

「な！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

霧島と幼馴染ということでの嫉妬だろう。面倒だし終わらすか。

「落ち着け。殺すなら、Aクラス戦を終えてからでいいだろ？雄二の策以外で、Aクラスを倒せる考えがあるのか？」

それに…

「霧島は男には興味ないらしいじゃないか（棒）」

ホントは雄二しか狙ってないんだがな。噂を有効活用しようではないか。

『クツ…止むを得ん』

『首を洗って待ってるよ！』

こんなもんでいいだろ。クラスの奴らの視線は姫路に行き、納得をしていた。

「話を戻すが、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違っってウソを教えていたんだ」

へえー。

「アイツは一度覚えたことを忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

今回はそれが仇になる…ってか。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ！そうしたら俺達の机は  
『システムデスクだ！』」

そう上手くいくのか？

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今は代表の雄二、明久、姫路、秀吉、康太と俺でAクラスにいる。

島田エ…

「うーん、何が狙いなのか？」

Aクラスの交渉テーブルについてるのは秀吉の双子の姉である木下



優子。瓜二つという言葉がぴったり。  
そんな優子ちゃんはいじるととても可愛らしい反応をする。これ豆知識。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

疑うのは無理もない。下位クラスがわざわざ一騎打ちで挑もうとしてるんだからな。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね。だからといってわざわざリスクを冒すのもね」

「賢明だな」

予想通りであるね。

「ところで、Cクラスの連中との戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？なんの問題もなし」

秀吉の女装の挑発に乗ったCクラス。優子ちゃんが鋭い視線を送ってくる。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって…、昨日きていたアレ？」

「ああ。あれが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだみないだが。さて、どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3か月間は戦争できないはずよね？」

戦争に敗北したクラスは3ヶ月間の空けないと自ら戦争は出来ない。そうしないと泥沼化するしね。

「知ってるだろ。実情はどうあれ、対外的には『和平交渉で終結』  
ってなってる。規約には問題ない。……Dクラスもな」

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

雄二は悪役がフィットするな。俺も言われるが。

「うーん…分かったよ。何を企んでるか知らないけど、代表が負け  
るなんてありえないからね」

「え？本当？」

明久が驚いて声を上げる。他のメンバーもそうみたいだ。

「だって、あんな格好の代表と戦争なんて嫌だもん…」

根本の女装がこんな所で役立つとは…

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そう  
だね、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回で3回勝った方が勝ち、  
ってならいいよ」

「う…」

可愛い顔してちゃんと考えてるのね。おじさん、飴あげちゃうぞ。  
Aクラスのだけど。

まあ、こっちが姫路を出す可能性が無くも無いからな。

「そうか。その条件を呑もう」

「ホント？嬉しいな」

うむ。良い笑顔だ。

「だが、勝負する内容はこちらがきめさせて貰う。そのくらいのハ  
ンデはあってもいいだろう?」

「え? うーん……」

悩む優子ちゃん。これで仲間の立場が変わるかもしれないしな。

「……受けてもいい」

「うわっ!」

「……雄二の提案受けてもいい」

突然現れた静かな、だが凜とした声。

その人物は霧島翔子である。

「あれ? 代表。いいの?」

「……その代わり条件がある」

「条件?」

「……うん」

霧島は姫路をじっくり観察し、雄二に顔を向けて言い放つ。

「……負けた方は何でも言うことを聞く」

「…… (カチャカチャ)」

康太、行動が早い。それにお前の期待外れになるだろう。

「じゃ、ごうしょう? 勝負内容は5つのうち、3つそっちに決めさ  
せてあげる。2つはこっちで決めさせて?」

これは条件いいだろ。こちらに3つ勝てるカードがあればいいんだから。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！姫路さんが了承してないじゃないか！」  
「心配すんな。絶対に姫路に迷惑は掛けない」

雄二と霧島の問題だからな。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「……分かった」

決まったなら、教室へ戻るか。だが、ちょっと話していくか。

「霧島さん、ちょっといい？」

「……？」

どうやら気付いてないようだ。そういえば、いつも変装してたからな……メガネ、メガネつと。

「……あつ」

気付いて貰えたようだ。

「……貴方、高校生だったの？」

「驚かせてごめんね？それは置いといて、これあげる」

「……これはっ！？」

そう、坂本雄二の隠し撮り写真である。レアな表情を、この為に撮

っておいたのだ！

「昔会った時に言ってたからさ。再開の記念にね？」

「……ありがとう。服部は良い人」

会った時は、お金持ちのパーティの時だ。俺は他の人を護衛してたんだがその時にたまたま話してさ。

それを覚えていたから隠し撮りなんかしてたのさ。勝手に依頼とか言ってたけど。

「いえいえ。だから、今回の戦争頑張ってるね。雄二にお灸を据えてやって」

「……うん。頑張る」

さて、目標は果たしたが…クツ、優子ちゃんの視線が痛い…

「代表と何を話してたのかな？」

「ん？久しぶりだねーって話しだよ」

簡潔だが、大体合ってるだろう。だが、ジト目は止まらない。

「もしかして優子ちゃん。嫉妬だったり？」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

おー、顔が赤くなりましたなー。

「違うのか…。俺は交渉してた時の雄二に嫉妬したのに…」

「ふえ！？な、何言ってるのよ！？」

なんだよこの可愛い生き物。お持ち帰りしたいな。

「お持ち帰りしたいけど、時間みただから帰る。じゃね！」  
「お、お、お、お持ち…帰り…」

優子ちゃんの オーバーヒート！

ふう、満足満足。優子ちゃん弄るのは楽しいなあ！

## 第十一話（後書き）

次回で第一巻終わらせるつもりですー

## 第十二話（前書き）

ちょっと違いますが。

ムツリーニの鼻血耐性が強くなったり弱くなったり



## 第十二話

「では、両名共準備はいいですか？」

今日は学年主任の高橋先生が立会人を務めるようだ。会場はAクラスだし、担任つてことで丁度よかったんだろう。

「ああ」

「……問題ない」

両代表が肯定の言葉を呟く。いよいよ始まるぞ！

「それでは一人目の方、どうぞ」

「よし。頼んだぞ明久」

「え！？僕！？」

先陣は明久か…点数差あつてもそこそこ戦えるしな。

相手はメガネっ娘の佐藤美穂さん。ちなみに教科は物理みたいだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じてる」

そうは言ってるがニヤニヤしてるのが分かるぞ雄二。

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

うわあ。この明久、ノリノリである。

味方のFクラスからも、半信半疑だぞ。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか…」

対戦相手の佐藤さんは警戒をしている。良い観察眼だ。

「あれ、気付いた？御名答。今までの僕は全然本気なんてだしちゃいない」

これはフラグ。もちろんやられるほうな。

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ、君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕

」

ここで、明久が息を大きく吸い込む。周りは静かに次の言葉を待つ。

「左利きなんだ」

《Aクラス 佐藤美穂 物理 389点》

VS

《Fクラス 吉井明久 物理 62点》

さすが明久。こいつは天才なのかもしれないな。

あの状況で、左利きなんていう奴は居ないだろう。

そして、雄二の予想通りだったみたいだ。

「では、2人目の方どうぞ」

「……………（スクツ）」

次は康太みたいだ。科目は保健体育。康太の唯一にして最強の武器である。

「じゃ、ボクがいこうかな」

Aクラスは、ボーイッシュな女の子の工藤愛子さんだ。特技がパンチラという素晴らしい女の子だ。ぜひ拝みたい。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

あの余裕綽々という態度：相当の実力者か。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミとは違って実技で、ね」

なんだろうか、このトキメキは。ゴールしてもいいよね？

「……………正吾」

「ん？」

無言を貫いていた康太が話しかけてくる。

「……………先に逝く(ブシャアアッ!)」

妄想でこんな早くやられるとは…。

だが、コイツは立ち上がってくる。親友、そして相棒だからこそ分かる。

だからこそ、ここは言ってやらねばならない。

「康太ッ!!お前は、こんな所で死んでいいのかよ!?目の前に、実技が得意な女の子が居るんだぞ!?今までのお前の知識、理論が試せるんだよ!!それに、俺達の約束忘れたのかよ!？」

「……………忘れる訳が、無いッ!!」

そう言い、康太が鼻血をドクドク出しながらも立ち上げる。  
フツ…さすがだぜ相棒。周りが呆然としてるなんて気にしてはいけない。

「土屋君」

気を取り直したのか、相手の工藤さんが康太に話しかける。顔が若干赤い。

勝手に俺達で盛り上がって、康太の実技相手という設定にされてたんだしな。すまないと思う。

「そんな状態でボクに勝てるのかナ？」

そう言いつつ、スカートの裾を持ち上げる。も、もしかここで特技のパンチラが見れる！？  
だが

「……………（ブシヤアアツ！）」

これはアウトだ。工藤愛子本人との実技を想像してダメージを負っていた所に、工藤愛子追撃の本人によるパンチラ（未遂だが）なんて、これを康太が耐えられる訳が無い。

「康太ああああ！！！」

「……………（グッ）」

《Aクラス 工藤愛子 生命活動 WIN》

VS

《Fクラス 土屋康太 生命活動 DEAD》

戦わずとして、勝利がついてしまった。だが、康太的には幸せなのかもしれない。最後に親指立てて、微笑んでたからな…

「まさかムツツリー二がやられるとはな…」

「それより、ムツツリー二と正吾の約束のが気になるよ」

「一体何だったのじゃ」

これで0勝2敗。後が無くなった。

これが戦争か。忘れていたよ。そんな手を使ってでも相手を倒す…

「雄二」

「何だ」

「次の試合に出させてほしい」

「構わないが…秀吉、それでいいか？」

「構わんのじゃ」

本当は出ない予定だったんだがな…相棒を殺られて黙って居られる訳がない。

俺は静かに戦闘場所を歩を進める。

「まさか、康太をあんな搦め手で殺るとはな…恐れいったよアクラス」

俺の言葉に教室は静かになる。

「実にけしからんよな。あの逝く間際の康太の幸せそうな笑みが全てを物語っていたよ…」

教室内は依然として静かだ。

「だからこそ、だからこそだ」

俺は息を大きく吸い込む。そして、

「俺にも同じ手で来い！！全力で受け止めてやるッ！！実技、理論  
どちらでも構わない！！」

教室内がより一層静まる。だが、一拍置いて

「『『『『ただのバカだぁー！！』』』』」

生徒の叫びが聞こえる。

『おい、ずるいぞ服部！！俺と代われ！！』

『そつだそつだ！！』

『俺の方がその想いは強い！！』

さすがFクラス諸君だ。分かってくれると思つてたよ。

「正吾がこんなバカとは思わなかった…」

「ムツツリのムツツリーニ、オープンな正吾か」

「正反対だからこそ、仲がいいのかもしれないな」

雄二、秀吉よく分かつてるじゃないか。

「ハア…アンタ大勢の前で何言つてるのよ…」

こちらに来たのは優子ちゃん。

「優子ちゃん…君が相手か？優子ちゃんみたいな美少女なら、俺も本望だよ」

「び、美少女って…アタシがそんなことするわけないじゃない…」  
「そ、そんな…」

だが、只で転ばないのが俺だ。

「ならこうしよう。負けた方は何でも言うことを聞く。これをこの試合適用させよう」

「な、何でも…分かったわ」

掛かったな！！ここで科目選択権が活きるッ！！

「散って逝った康太に捧ぐ…保健体育で」

「試験召喚」

《Aクラス 木下優子 保健体育 301点》

VS

《Fクラス 服部正吾 保健体育 500点》

「「「!?!?!?!」」」

教室内が驚嘆の声を上げる。

「康太…見ていてくれるかい…お前に負けないよう俺も頑張ったんだ。それでも、お前の572点にはお及ばなかったよ」

「「572点!?!?!」」

またまた驚嘆の声が上がる。だが、康太は力を出せずに終わった。

だからこそ、俺は全力で行く。

「さあ、俺の欲望のために行かせてもらおう!!! 『分身』!!!」

初登場の俺の腕輪。400点越えしてる教科あったが、いつも不意打ちで使う場面なかったんだよね。

この能力は、自分や装備を点数消費して増やせる。単純だろ? 分身させるものによって消費させる点は変わるが。他のにも応用できるがわざわざ教えることは無いよね。

優子ちゃんの召喚獣がランス構えて突きの連打してくるが、かわすかわすかわす。

かわしながら増やした棒手裏剣を投げて投げて投げまくる。質より量とかじゃない。両方を兼ね備えてるんだぜ!

「点数差があっても、油断しないで確実に弱らせるなんて…強いわね」

「元々、俺は油断しないけどね。それに戦力差のあったB・Dクラス戦も経験してるし」

そう。俺達は不利と言われ戦争を勝ってきてる。相手の油断、慢心を突いたりな。

だからこそ、俺はそんな隙は見せない。

そんな言葉を交わしながら、突きの猛攻は止まらない。が、多少の疲労が見えてスピードが落ちてている。

ここだッ!

「一度突いたものは、引かぬとまた突けないのが道理!!! って言うてみたかったんだよね」



相手がランスを引いたと同時に前に出る！そして懐に潜り込み

『勝者、Fクラス 服部正吾』

勝ったか…これで何でも権はいただいたぜ！やっほい！

「正吾！最初はどうなるかと思ったよ」

「ああ。ただのバカかと思ったんだがな」

「ムツツリーニ並みとは凄いのう」

「……………お見事」

「ありがとな」

戻ってきた俺に称賛の言葉を掛けてくれる仲間。一人違うが。だが、しかし待つてほしい。お見事って言った奴は誰だ？

「康太生きてた……………のか」

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！死んだと思った友人の方を見たら、工藤さんに膝枕されて看病されてたんだ！

『ボクのせいで危険な状況だったみたいだから』だって？そのお詫びで膝枕看病セットだと？

「康太…羨ましすぎるぞ」

「……………役得」

クソツッ！！鼻血を耐えながらるのが不便そうだが、なんて素敵なシチュエーションだ。

「……………正吾も頼めばいい」

「工藤さんに？順番待ちか」

「ハア……」

なんか溜息つかれたぞ？そんなに俺にするのが嫌なのか。だが見た感じ、康太だからしてる……つまりそういうことだってばよ。なるほど納得。

だが、なぜ康太まで？

「服部君？その何でも権を使えば、優子に膝枕してもらえるんじゃないカナ？」

ツ！！鬼才現るツ！！

「そういう事なら善は急げだな。2人ともごゆっくり」

「／／」

恥ずかしがっちゃって。

「優子ちゃん」

「…何よ？」

もし俺が負けてたらどうなってたんだろう。関節技フルコース？だが、それも身体の密着という意味ではご褒美かもしれない。

「何でも権だけどさ。あれ、やってよ」

そう言って、康太・工藤コンビの方を指す。

「あ、あれって……」

「そう、膝枕だ」

有無は言わせない。手を握って例のペアの隣に陣取る。そこしかスペースが無かった。悪いな。

優子ちゃんは渋々といったカンジだが、約束は約束だ。させてもらおう。

「いただきます」

「……！」

ビクッ！！となったがどうやらすぐ治まったようだ。

生脚の感触、匂い、体温…これはスバラシイの一言。

「なんやこれ。幸せすぎる…俺、消えるのか？」

そこで俺は気付いてしまった。

顔を優子ちゃん側に向ければ、スカートの中を見る…？いや、ここで欲張るのはいけない。だが、ここで向いてこそ俺じゃないのか？いや、止めておこう。

ちなみに、4回戦だが姫路と久保利光つてのが戦っている。それより、こっちのが重要だ。

「優子ちゃん、俺に一生膝枕してくれないかな」

「い、一生つて…ほ、ほら私達、年の差とかあるじゃない!？」

顔を上げ、優子ちゃんの頬に手を添え目を見つめて告げる。

「年の差…俺達にとってそんな障害は小さなものだろ？」

優子ちゃんの顔が真っ赤っか。

周りが騒がしくなる。どうやら、姫路が勝ってイーブンに持ち込んだようだ。

(ねえ、土屋君。服部君っていつもああなの?)

(……………)(コク)

(優子も大変だねえ。土屋君はどうなの?)

(……………?)

(ハア…)

なんか隣で話してるが喧騒で聞こえなかった。  
話を戻すが、最終決戦が始まるようだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限  
アリだ!」

ざわ…!

雄二の宣言でAクラスがざわめく。そういえば、そんな作戦だった  
な。

『上限アリだつて?』

「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

『注意力と集中力の勝負になるぞ……………』

さてさて、どうなることやら。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。  
このまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていく。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ。任された」

明久と雄二が、力強く握手をしている。青春だな。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久のことか。気にするな。後は頑張れよ」

「はいっ」

姫路とのやり取りを終え、楽しそうなやんわりとした笑みを浮かべる。

「」「(ビツ)」「」

俺と康太は、ピースサインを送る。

「お前ら…まあいい。お前らの力には随分助けられた」

「それに正吾。お前がこのクラスに居なかったらここまで来れなかったかもしれない」

ほう。これは中々照れますな。だが、俺が居なくても大丈夫だったろう。ちなみに俺達は膝枕され中。

「では、最後の勝負を行います。参加者の両名は視聴覚室に向かってください」

こうして、各々の代表は戦場へ向かっていったとさ。

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

高橋先生が機会を操作し視聴覚室の様子が映し出される。Aクラス

マジ高性能。

試験前の約束事を確認し、試験が始まる。

しばらくし、Fクラスから教室を揺るがすような歓声が湧きあがる。

「な、何？Fクラスの人はどうしたのカナ？」

工藤さんが康太を膝枕しながら不思議がってる。優子ちゃんもだ。

「……………問題に大化の改新があった」

「「？」」

2人の当然の反応。だから、どうしたの？って思うだろう。

「霧島と雄二は幼馴染。昔に大化の改新の年号を間違えて教えた。

それが出れば勝てるって作戦」

「え……………それじゃ」

「……………Fクラスの勝利」

2人の顔が青ざめる。

「ところがどっこい……………！！」

「？」

今度は逆に康太が疑問顔。

「肝心の雄二の成績がな。神童なんて言われても、今現在は『所詮

Fクラスか』って成績なんだよ」

「って、事は……………」

大歓声の中、結果が表示される。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

「最後の最後で雄二は詰めを誤ったって訳だ」

「3対2でAクラスの勝利です」

Aクラスに戻ってきた高橋先生の締めセリフ。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

明久が興奮している。まあ、あれだけFクラスを纏め上げたのにこのオチだしな。

明久は、姫路に止められたようだが。

「……でも危なかった。雄二が油断していなければ負けてた」

「良い訳はしねえ」

「良い奥さんだな。負けたお前を立ててくれるなんて」

ここで、俺が参入。声だけだが。

「正吾、何言ってるの？奥さんだなんて」

「今から分かるぞ。だろ？霧島」

静かに頷いて、霧島は雄二に視線を向ける。

「……雄二、私と付き合って」



教室内の時が止まった。

「……やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

明久が凄い拳動不審である。いつの間にかカメラを用意していた康太も同様。だが、膝枕に未練があるのか膝枕から離れないでいる。

「その話は何度も断つたろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

「一途やわー。こんな美人さんに惚れられるなんて素敵やん。」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やっぱ、約束はなかったことに」

それが最後の言葉だった。そのカップルは勢いよく教室を出て行った。

『……………』

教室内に沈黙が訪れる。

その空気を破つたのは…

「イイハナシダナー。それより、西村先生どうかしたんですか？もしかして、この敗戦で担任が西村先生になったり？」

もちろん俺だ。俺の言葉が終わると同時にドアを開け、教室に西村先生が現れる。

「服部。色々突っ込む所があるが…その通りだ。これから我がFクラスの補習についての説明をしようと思ってな」  
『なにい？』

西村先生が何か言っている。

まあ西村先生じゃないと、この血気盛んなクラスは抑えられないと思っし妥当だな。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を送ってみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

無いと思います。

「とりあえず、明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるっ」

そのセリフに反論するかと思いきや、意外とやる気ありそうな目をしてる明久。

そんな、明久に近寄る島田。なんだデートの誘いか。しかし、映画か…最近見てないな。

「康太、俺達も映画行こうよ」

「……………構わない」

「秀吉も誘おうか。男2人ってのもあれだし」

「……………(グッ)」

OKサインが出た。さて、惜しいがこの膝枕から離れる時が来たか…。

「ボ、ボク達も行っていいカナ？」

工藤さんから誘われる。これは嬉しい。康太の為にもなるしな（キリッ

「うん。人数居た方がいいし。だろ？康太」

「……………（コクッ）」

「優子も行くよね？」

「ア、アタシ？アタシも行っていいなら…」

「もちろん。じゃ、膝枕は惜しいですが行きますか」

素晴らしい感触、良い匂い、良い体温よ…さらばッ！！

『ちょっと待ったあ！！』

そう言い現れたのは、怪しいフードを被った怪しい集団。その手には鎌や蝋燭、ムチなど。

『我ら異端審「俺達、用事あるから。じゃあね」待って下さい！お願いします！』

そこまで言うなら仕方ない。

「で、何？嫉妬？」

「分かってるなら話が早い。今更罪を悔い改めても遅いぞ！掛かれッ！」

ふむ。相手は43人か。

「康太、お前もやるか？」

「……………（コクッ）」

「なら、どっちがより仕留められるか勝負な」

「……………（ブンブン！）」

こういうのは言ったモン勝ちである。

敵が迫って来ているので、先頭にいる奴の懐に一瞬で入り

「脱縛衣！！」

説明しよう。これは相手の洋服で相手を縛る技だ。つまり相手は下着のみになる…！！

マンガで読んで、マネキン相手に練習したのは良い思い出だ。

「本来は美少女に使う予定だったんだがな。実戦を兼ねてやらせてもらう。ついでに、その姿を新聞部にリークしてやる。泣いて喜ぶんだな」

「……………その技を教えてほしい（ポタポタポタ）」

康太。技の能力だけで鼻血を出せるとは。

『くそ！何かに目覚めたらどうしてくれる！』

『Aクラス女子に見られるウウウ！』

『俺に技を掛けてこい！見切ってやる！』

ダメだこいつらなんとかしないと。脅しとして使ったのが逆効果だったとはな。

なら、使わないまでだ。得物は、目の前にあるしな。

そう言つて、技を掛けて半裸状態の須川を、持ち上げて振り回す。

『須川を得物に使つたど！？ぎゃあああ！！』

『鉄人並みの化物お！！ひいひい！！』

全く失礼なやつらである。そういえば、久しぶりに人間を得物に使つたな。

結果はというと、34対9。圧勝である。

文房具は集団戦に向かないからな。

「片づけは終わったか…。西村先生、後はお願いします」

「戦死者は補習！」

いや、戦死ではない。だが、片付けしてくれるならそれでいいか。

「じゃ、Aクラスの皆さん失礼しました。それでは」

挨拶つて大事だよな。教室内は壊さないよう立ち回つたし、見た限り大丈夫だったしいだろう。

そう言つて、俺達は教室を出た。

後にAクラスでは、『性識者コンビを敵に回してはいけない』という暗黙の了解が出来たらしいが俺と康太はそれを知る由もない。

## 第十二話（後書き）

予想以上に長くなりました

## 第十三問

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺達を通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷、料理の為の調理器具、試験召喚システムについて展示するクラス。

準備の為にLHRの時間は、どの教室を見ても活気にあふれている。そして、俺達Fクラスはというと

「吉井！こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球、なんか場外に飛ばしてやる！」

野球をしていた。違う方向で活気に溢れている。

投手・明久、捕手・雄二。いいバッテリじゃないか。

俺？遊撃手だよ。康太は二塁手。鉄壁の二遊間ってやつや！アライバに勝てるんじゃないか？冗談だけど。

さて、雄二からのサイン見て守備位置決めないと。なにになに…？

『カーブを』

ふむ。初球にカーブか。

『バッターの頭に』

それはアウト。退場ものだろ。明久も思わず突っ込んでいる。

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバイ、鉄人だ！」

明久の叫び声が聞こえる。俺と康太は、既に逃走してる。逃げ切るには、尊い犠牲が付きものなんだ。

3階のFクラスからロープを垂らしといて良かったよ。

「吉井、キサマがサボりの主犯か！」

「違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？」

今までの行動からしてだろう。

「雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」

ここで友人を売る明久。いつもと逆のパターンか。売られた雄二はどんな対応をするのかな？

『フォークを 鉄人の 股間に』

逃げながらこのサインを出すとは、さすが元神童だけあるな。ストリートだと反応しやすいからな。

「全員教室へ戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まっていな  
いなんて、うちのクラスだけだぞ！」

西村先生の恫喝が響く。野球をやっていた奴らは教室へ連行されたとき。

俺と康太は無事だったよ。いえい。



「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期がきたんだが」

教室に戻ってきた俺達は、渋々といったかんじで出し物を決めることにしたんだが、

「とりあえず、議事進行及びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

クラス代表の雄二がこれである。これまでの付き合いで分かったが、興味のないことにはとことんやる気をださない。

俺は、初参加ってこともあるしどういうものか詳しくは分からないから、全権を委ねられることは無いだろう。ボーっとしてもいい。最近、寝不足だし。

「んじゃ、実行委員は島田ということでもいいか？」

あら、もう決まりそうなの。早いね。

「え？ウチがやるの？うん…、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

突然の指名に目を白黒させる島田。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？私ですか？」

いや、姫路だと時間が掛かる。話し合いだけで終わりそうだし、雄二も同じようなことを言っていた。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

と、話している。召喚大会ってのは、文月学園の『試験召喚システム』って技術を公開するために行われるようだ。

「3人とも。こっちの話を続けていいか？」

そう言っつて、話を戻す雄二。お前が実行委員でいいだろ…ま、そうなるはずもなく実行委員は島田になった。サポート要因として明久も任命された。

「んじゃ、後は任せたぞ。ふあ…」

やることやったようで雄二はあくびをしながら席に戻る。

「それじゃ、ちゃっっちゃと決めちゃうわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば拳手してもらえる？」

そう島田が告げると、数名拳手する。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

あれ？康太、やる気あったの？

「……………写真館」

これで決まりでいいだろう。

だが、危険な匂いがするらしいから候補止まりだと…？

《候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』》

なんだろう。凄い好奇心がそそられる…！！

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶といたいところだけど、斬新にウエディング喫茶を提案します」

これって、男も着るの？やだ、ハズかし／＼  
別にいいんだけど。

《候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』》

これは…。うん、どうしよう。

「さて、他に意見は はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川が颯爽と立ち上がる。

「俺が提案する中華喫茶は、本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやって」

長いので割愛してもらおう。ようするにチャイナドレスはやらない。これは残念だ。

《候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』》

うすうす思ってたが、明久のやつ、会話の内容で覚えてるところだけ書いてるだろ…

それなのに、いいセンスしてるのは才能なのか。

「皆、清涼祭の出し物はきまったか？」

お、西村先生の登場だ。

「今のところ、候補は黒板に書いてある3つです」

《候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』》

《候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』》

《候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』》

「…補習の時間を倍にした方が良くかもしれんな」

バカだと思われるな。うん。

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

みんな、必死に抵抗してるなあ。

「馬鹿者！みつともない言い訳はするな！」

さすが、西村先生。言うときはいいますな。

「先生は、バカな吉井を選んだことが自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！」

鉄人エ…。率直にいいすぎだろ…。

「全くお前達は…。少しは真面目にやったらどうだ？稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

ため息混じりの西村先生のセリフ。それを聞き、クラスのやる気があがる。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

特にやる気を出してるのが姫路。

それを機に、クラス内での意見のやり取りが続く。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田が治めようとしても効果は無いようだ。それを流して、意見の言い合いは続く。



3人居ればいいだろう。他に出来そうな奴もいそうだし。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋と服部のところ、ホール班はアキのところを集まって！」

何時の間に、明久はホール班のトップになったのだろうか。

「それじゃ、私は厨房班に」

必殺料理人がこちらへやってくる！

「おい。毒を入れたら死人が出」

最後まで言えなかった。明久に防がれたからだ。

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

なぜ、言ってやらないのだろうか？被害を受けるのは自分だろうに。

『明久、グツジョブじゃ！』

『……………（コクコク！）』

被害者達は物凄い勢いでアイコンタクトを送っていた。寝ているハズの雄二でさえ小刻みに震えている。

「え？吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

無自覚って怖いよね！

明久が必死に言い訳を考えている。正直に言えば済むのに。俺は、

言おうとしたけど防がれたからどうでもいいや。食べなきゃいいだけだしな。  
どんな言い訳をしたか知らないが、姫路が照れている。それに島田がキれる。いつもの光景か。  
こんなドタバタの状態で上手くいくのかな？

放課後、ちよつとトイレ行って教室に戻ってきたら良く分からない光景が飛び込んできた。

明久がなぜか処理落ちしかけて、『モヒカンになった僕でも好きでいてくれるかい？』なんて、秀吉に言ってるんだ？廊下で聞こえてきた秀吉の障害は年の差発言と関係してるのか？そつえば、優子ちゃんも同じことを前に言ってた気がする。姉弟だからか。ま、とりあえず…

「何してるの？」

「しょ、正吾！あのね」

話を聞くとどうやら、このままだと姫路が転校するみたいだ。だから、明久が処理落ちしかけてたのか。不測の事態に弱いからな。転校する理由は設備だけじゃないと思うがな。

しばらくの沈黙が流れる。その空気を打破するかのようには島田が話す。



「…アキはその…瑞希が転校したりとか、嫌だよな…？」

島田が探るような目で明久を見る。明久の返答は…

「もちろん嫌に決まってる！それが美波や秀吉、正吾であつても！」

だろうな。コイツはこういう恥ずかしいセリフを平然といえる奴だ。

「そっか…。うん、アンタはそういう奴だよな！」

島田が嬉しそうに呟く。だが、雄二だったらどうでもいいと思つて  
そうだな。

「そういう事なら、なんとしても雄二を焚きつけてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

そう言つて、明久が携帯で雄二に電話を掛ける。雄二のカバンはあ  
るし、学校内にはいるだろう。

「あ、雄二。ちょっと話が」

どうやら掛かったみたいだが、雄二が一方的に話して電話は切れた  
みたいだ。

島田が『使えないわね』つて目線を送ってるが、コイツはホントに  
明久に好かれようとしてるのか？

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見え  
て異性には滅法弱いからの」

だろうな。秀吉の鋭い指摘に同意だ。

「そうすると、坂本と連絡を取るのには難しいわね」

島田が大きく息を吐く。だが、明久は

「いや、これはチャンスだ」

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。3人とも協力してくれるかな？」

「それはいいけど…坂本の居場所は分かってるの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、何も雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃない」

「まあね」

なんだろう、明久が凄く頼りになる。そういえばだけど、俺ってすごい空気だよね！居なくてもいいんじゃないかな？

場所が変わって、今は明久と女子更衣室前に居る。なんで、男のお前らがそんな楽園の前にいるんだって？

明久が『雄二のことだから、裏をかいて男子禁制の場所に逃げ込む

ハズだ』って言うからさ。  
それに着いてきたってワケ。

「じゃ、行こうか正吾」

なぜ、俺まで中に行かなきゃいけないんだ。確かに、中には行きたいがこんな目立つ時間帯はアウト。

「1人で十分だろう。俺は外で見張ってるよ」

妥当な答えだよな。着替えてる女子がいるなら、俺が行っても良かったんだがいなさそうだし。

「そうだね。それじゃ、僕1人で行ってくるよ」

そう言って、明久は中に入っていった。

しばらく待つと、女子更衣室に近づく影が…！やっぱり、外で待機で正解だったな。

このまま放っておいても楽しそうだが、約束だし時間稼ぎするか。

「すいませーん…」

やばい。話しかけた方がいいが、話題がないぜ！てへぺろ（・>）

「あら…」

相手が気付いたようでこちらを振り向く…っ…っ…

「優子ちゃんか。どうしたの？」

知り合いで良かったわー。これでなんとか時間稼げるかもね！

「どうしたのって…見れば分かるでしょ？」

そうだな。優子ちゃんの現在の服装は体操服。ってか、更衣室は着替える為にあるんだよね！

余談だが体操服から覗く健康的な脚が眩しいぜ…！

「なるほどね。じゃ、一緒に行こうか」

「ええ、そうね……って、アンタは外で待ってなさい！！」

鋭いノリツツコミだ。だが、最初は気付いてなかったみたいだからチャンスがあつたかもしれない…！！惜しすぎるぜ。って、欲望に忠実になりすぎて女子更衣室前に来ちゃった。  
当然

ガラッ！！

「「あっ」「」

鉢合わせするよね。うん。

「「……………」」

一瞬、沈黙が流れるが…

「先生！覗きです！変態です！」

優子ちゃんが叫ぶ。正しい判断だ。恐怖で助けを呼べないって事態

もあるが大丈夫だったみたい。

「逃げるぞ明久！正吾！」

「了解っ！」

あれ？俺って、無罪じゃないか？逃げなくてもいいだろ、優子ちゃん  
が証明できるし。

だが…

『なに！？服部が覗きだと！？』

え！？なんで、俺だけなの！？雄二と明久の声は聞こえなかったの  
！？

クソッ！逃げるしかない！今、話したところで問答無用で補習室行  
きだ！

「明久、雄二！後でクロスッ！！」

死刑宣告もしたし、さっさと逃げるか。後で状況説明するために証  
言者も欲しいし…

「振り落とされないように、しっかり掴まっててね？」

「えっ？」

そう言っつて、優子ちゃんを背に回す。いわゆる、抱っこ状態。

「えっ？えっ？」

まだ状況を掴めてないようだ。だが、説明する暇はない！！一気に  
走り出す！！

「三十六計 逃げるに如かずうーってな!!」

「待て!!服部!!」

待てと言われて待つバカなんていないでしょ。こんな状況で。

さて、前方にある新校舎二階の窓に逃げ込めばやり過ぎせるはず…

!!

「そっちは行き止まりだ！観念して指導を受けろ！」

こんな時に持つてて良かった鉤縄！

「あいきやんふらーい」

「きやああああ!!」

いや、実際は飛んでないけどね？女の子には刺激が強かったか。

まあ、その鉤縄を駆使して2階に飛び込むことは出来た。撒きビシもオマケで通路に撒いといたから逃げ切れるだろう。

「くっ！その運動神経を悪用しおって！」

いやいや。冷静に話せる状況じゃないでしょ。なら、一度態勢を整えてから説明するって。

まっいいか。一度言ってみたかったんだよね。

「あばよ。とつつあ〜ん！」

『服部！明日は逃がさんぞ！』

やべえ。これって、まさか挑発しちゃった？

「ハア…正吾、アンタバカなのかしら？」

いや、ホントに面目ないッス。

これもそれも明久と雄二のせいだ。一発殴ってやる。

この後、優子ちゃんを付き合わせたお詫びとしてお姫様抱っこしながら職員室に居た西村先生を訪問して事情を説明した。一発良いのを貰ったけど、無実って事を証明出来てよかったよホント。

## 第十四話（前書き）

最初は明久視点です



## 第十四話

僕達は今、Fクラスの教室で姫路さんの転校の件について話してる  
ところなんだ。と、言ってももう終わるところなんだけどね。

正吾?…正吾は犠牲になったのだ…だって、鉄人に捕まったら補習  
室だよ?仕方ないよね。うん。

「どうするも何も、学園長に直訴すればいいだけだろ?」

ここまでの話し合いで、問題点は3つ。簡単に言うと、

?貧相な設備（快適な学習環境ではない）

?老朽化した教室（健康面に難アリ）

?周りのレベルが低い（切磋琢磨出来ない）

という事なんだ。短時間で、問題点を挙げるとはさすが雄二。口に  
出しては言わないけどね。

だけど、僕らが学園長に言っただけで?、?の問題は何とかなるの  
かな?

?は、Fクラスだからね…けど、それに対しては召喚大会に出て優  
勝すれば大丈夫みたいだ。

その疑問に答えるかのように雄二が続ける。

「ここは曲がりなりにも教育機関だぞ?いくら方針とはいえ、生徒  
の健康に害を及ぼすような状態であるなら。改善要求は当然の権利  
だ」

そう言われると『ああ、たしかに』って思うね。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

善は急げって言うしね。合ってるよね？

「そうだな。学園長室に乗り…込むか…」

ん？どうしたんだろう？雄二が小刻みに震えてる。まるで、霧島さんにお置きされる前兆みたいだ。

けど、雄二の視線の方向は窓ガラスの方だ。さすがに、そんな所から霧島さんが現れる訳ないよ。

そう思い、僕もそっちの方を向いたんだ。

そこに居たのは、触れただけで人を殺せそうな殺気を纏った鬼がいた。いや、正吾だった。

まさか、鬼半蔵が現世で見れるなんて！なんて、呑気なことでは言われてられない。

だって、「明久、雄二…屍を晒せ」って呟いてるんだから。嫌な汗が流れる。震えも止まらない。ああ、これは詰んだな。と思う。だけど、その状況を治めようとした第三者の声が割って入る。

「しよ、正吾！落ち着くのじゃー！」

秀吉…こんな状況で止めに入ろうとしてくれるなんて…この世に女神は居たんだね…

ちなみに、秀吉と美波には正吾が犠牲になった件は話してある。

「秀吉…お前まで巻き込みたくはない…」

鋭い目付きのまま話す正吾。だが、先ほどまでの殺気は既に霧散していた。

表情を見てみると、いつものような飄々とした悪戯っ子のような笑みを浮かべている。中々器用だ。

だが、秀吉は気付かない。

「正吾、お願いじゃ…友人の死はなるべく見たくないのじゃ…」

うう…ここまで思ってくれてるなんて嬉しいよ秀吉！お嫁さんにしたいくらいだ。

「……………」

その秀吉を見て無言で佇む正吾。どうやら楽しんでるようだ。

「なら…姉上とのデートをなんとしても取りつけるのじゃ！これで頼む！」

「うん、分かった。じゃあ、よろしくね」

あっさり返事する正吾。そして手には何処から取り出したのか、『ドッキリ大成功！』なんて旗を取り出している。秀吉は、その変わり身に呆然としている。

「いや、最初は殺気出して驚かすだけにしようと思ったんだけどさ。まさか、デート権を貰えるなんてね。ラッキーラッキー」

そう言って笑う正吾。毒舌ドSで天然ジゴロだがどこか憎めない奴

である。他の人は分からないけど、少なくとも雄二や秀吉も僕と同じように思ってるみたいだ。

「この件は置いて。学園長に会いに行くんだろ？さっさと行くぜ」

そうだった！正吾の襲来ですっかり忘れてたよ。

「そうだな。気を取り直して学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、翔子を見かけたら俺達は帰ったと伝えておいてくれ」

「うむ。了解じゃ」

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

美波の声援を受け、僕と雄二と正吾は学園長室を目指して教室を後にした。

正吾は、詳しい話の内容分かってるのかな？

やあ俺だ。俺達は今、学園長室前にいる。その途中で姫路転校の問  
題点を雄二に聞いたところ、俺と同じような考えだった。

それはいいといて、扉の向こうから言い争ってる声が聞こえてきた。明久もそれに気付いたようだ。

「どうした、お前ら」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけか。さっさと中に入るぞ」

そつだな。用件だけは伝えるか。都合が悪いかは相手の判断に任せればいいし。

「失礼しまーす！」

学園長室のドアをノックし、明久と雄二は中に入って行く。いや、少しは待とうぜ。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

バアさんの言う通りである。あ、バアさんってのは藤堂カヲル学園長のことだ。

試験召喚システム開発の中心人物である。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか貴女の差し金ですか？」

メガネを弄りながらバアさんを睨みつけたのは教頭の竹原。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高いらしい。それにしても…こいつが竹原ねえ…。

「バカを言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコイ手

を使わなきゃいけないのさ。負い目があるという訳でもないのに  
「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意のようですから」

これが大人の会話ってやつですな。怖い怖い。

「さつきから言ってるように隠しごとなんて無いね。アンタの見当  
違いだよ」

「…そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことに  
しておきましょう」

そう告げると、竹原は部屋の隅に一瞬視線を送り、

「それでは、この場は失礼させていただきます」

踵を返して出て行った。あの確認するような仕草…無意識なようだ  
けど命取り。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

竹原との会話を中断されたのを気にすることも無く、こちらに会話を  
振るバアさん。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

そう言つて、雄二が目立ち切り出す。雄二が敬語を使つてるとは。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、  
教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀  
つてモン。覚えときな」

おー。まともな事を言ってる。

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二。それでこの2人が

」

雄二が俺達を紹介する。

「2年生を代表するバカと転校生です」

普通に名前言えよ。

「ほう……。そうかい。アンたちがFクラスの坂本と吉井と服部かい」

「ちよつと待って学園長！僕はまだ名前を言ってますよね！？」

俺はともかく、明久は有名人なんだな。

「気が変ったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

口の端を吊り上げるバアさん。俺の周りには悪役が似合う奴が多いな。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにしても、こんな罵倒されてるのに雄二が落ち着いてるのは意外だな。

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるようなひどい状態です」

ん？ちよつと言動が綻んでる気がするぞ。

「学園長のように戦国時代から生きてる老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われまます」

丁寧な口調だが、これは雄二くんキレてますねえー。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババアという訳です」

これこそが雄二だな。そんな慇懃無礼な説明を受けて、思案顔なバアさん。

「あの学園長…？」

明久が不安そうに尋ねる。ま、普通こんな態度とられたらキレるよな。

「…ふむ、丁度いいタイミングさね…」

と、小声で呟いていたが、雄二と明久には聞こえてないようだ。

「よしよし。お前たちの言いたいことは分かった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

明久が凄く喜んでる。だが、



「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「…明久、もう少し態度に気を遣え」

本音がダダ漏れである。

「全く、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願いますか？ババア」

「そうですね。お願いします、ババア」

「お前達、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

バアさんが呆れ顔で2人を見ている。

「理由も何も、設備に差をつけるのが教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、ガキども」

一刀両断である。

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言ってるんだけどね」

明久のセリフを遮り、バアさんが顎に手を当てて続きを話す。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか」

学園長はこんな一生徒に過ぎない俺たちに頼みごとするなんて、何か裏があるか疑っちゃいますよね。

雄二も口元に手を当てて何か考えてるようだ。

「その条件って何ですか？」

黙りこむ雄二に代わり、俺が話を引き継ぐ。今まで空気だったから、引き継いだ訳じゃないんだからねっ。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ここの生徒ですし知ってますよ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「腕輪とどこかのチケットですよね？」

詳しくは覚えてないが、そうだった気がする。

「大体合ってるさね。学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

長ったらしい名前だな。ペアチケットという単語に雄二が反応する。

「それを回収しろってのが交換条件ですか？」

「…頭の回るガキは嫌だね。その通りさ」

だが、なぜだろうか？

「え？どうしてですか？」

「副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね」

良からぬ噂？

「それなら、商品に出さなければいいじゃないですか」

その通りだが

「教頭が進めたとはいえ、文月学園として行った正式な契約だから、覆す訳にはいかない」と

「…そういうことさ」

大人の事情って奴ですか。大人の事情って便利な言葉だよな。

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発手一杯だったんだよ。それに、その噂を聞いたのもつい最近だしね」

なんだかんだ責任を感じてるみたいだな。

「それで悪い噂ってのは？」

つまらない内容なんだけどね、と前置きしてバアさんは話します。

「如月グループは如月ハイランドに1つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

雄二が突然大声を上げた。まあ大方分かるが。

「霧島か」

「!?!」

図星か。ホント、霧島のことになると過剰反応を示すな。

「その結婚をさせるカップル候補ってのが、文月学園の生徒って訳か」

「くそつ。うちの学校はなぜか美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだしな。学生から結婚まで持っていけばジंकスとして申し分ないし、目をつけるのは当然か」

悔しそうに唇を噛む雄二。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

バアさんが雄二の独白を受けて頷く。

「雄二落ち着きなよ。僕らはその話を知ったんだから行かなければ済むじゃないか」

明久が落ち着かせようとしてるが…

「…絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる…。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚…俺の、将来は…」

逆効果みたいだ。雄二の目が虚ろだ。どうせ『チケットを手に入れたら一緒に行く』って約束でもしたんだろう。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって約束が気に入らないのさ」

「つまり」

「そうさね。『召喚大会の商品』と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやるうじやないか」

うーん。召喚大会の商品とな。ペアチケットのみじゃなく。

「無論、強奪・譲渡は論外さね。私は優勝しろ、って言ってるんだからね」

中々厳しい条件だな。どうせ、改修もお金はだしてくれないだろう。明久が頼むが無駄みたいだ。雄二も分かっているらしく、この取引に応じるようだ。

「そうかい。それなら交渉成立だね」

バアさんがニヤリろする。

「ただし、こちらからも提案がある」

ま、ただで転ぶわけにはいかないよね。

「なんだい？言ってみな」

「大会は、2VS2のタッグマッチ。形式はトーナメントで、一回戦ごとに教科が決まってるみたいだな」

同じ教科でやると、試合の派手さに欠け面白味もなくなるしな。

「それがどうしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせて貰いたい」  
なるほど。そういうことか。

「ふむ…。いいだろう、それぐらいなら協力しようじゃないか」  
「…ありがとうございます」

雄二の目付きの鋭さが増す。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだ  
ろうね？」

バアさんが念を押してくる。

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

雄二の不敵な笑み。やる気全開の表情だ。

「絶対に優勝してみせます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

明久もやる気全開だな。さて、俺は

「俺も参加するの？」

「当たり前だ（だよ）！」

ふむ。バアさんの反応が著しくないな。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「おっよっ！」

こうして、文月学園最低コンビが誕生することになったとぞ。  
俺のパートナーはどうしようか。

「服部。アンタはちょっと待ちな  
はい」

どじせにじなると思ってたぞ。

バアさんとちょっと話した後、嫌な奴に会ってしまった。これは厄

日って奴か？

「服部君。ちょっといいかな？」

教頭の竹原である。

「いえ。早く帰ってゲームしたいんでよくないです」

目付きが鋭くなった。短気は損気っていうよね。

「そう言わずにね。君にとっても悪くない話だと思っよ？」

ふーん。そうか。

「話を聞かせてもらいましょうか。ここじゃ目立ちますよね？場所変えますか？」

俺に得があるなら話を聞かないとね。使えるものは使いましょう。そういうことなので、教頭室に行くことになった。

「単刀直入に言います。私と手を組みませんか？」

「内容によります」

いきなり手を組もって言われても…はい。なんて言えないでしょ。

「そうですね。では、説明します。清涼祭で行われる召喚大会で優勝していただきたい」

「それだけですか？」

きな臭すぎるだろ。



「いえ。そこで優勝商品である『白金の腕輪』をデモンストレーションの時に暴走させてほしいのです」

「そして、この学園の醜聞を晒して失脚させると？」

「頭が回るみたいですね。その通りです」

はあ。やっぱりか。バアさんと話した通りだわ。

「で、その報酬は？」

「有名な学校への推薦と…お金ですね」

中々良い条件だが…

「せっかくですが、お断りしますよ」

まだ転校して1カ月近くで、再転校なんてメンドクサイ。それに、気にいってるし。

「…そうですか。なら…」

ま、ここまで相手がバラしたからには

「この人達がどうなっても？」

在り来たりな人質ってやつですよね。分かります。

ここでゴネても仕方ないしな。

「…分かりました」

「頭の良い生徒で良かった。また後日、連絡します」

「では、失礼します」

そう言って、教頭室を後にする。ほんと、厄日ってのは嫌ですわ。

## 第十五話（前書き）

一度、内容が消える罫

## 第十五話

清涼祭初日の朝。

俺と雄二はバアさんこと、学園長との試験科目の指定のことで話し合いをしてきた。俺はただ、聞くだけだったけど。最近、竹原との密談や情報収集で忙しくて寝る暇がないツス。

そして、教室に戻ってきたら明久が『んゴバっ』という人の口から出てはいけないような音を発していた。状況から見ると、恐らく姫路の毒団子を食べてしまったのだろう。

「うーっす、戻って来たぞー」

俺より少し遅れて教室に入ってくる雄二。その声に反応する明久。

「あ、雄二。それに、正吾もおかえり」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして、躊躇いも無く明久の食べかけであろう毒団子を口に運ぶ。

「…たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ」

「？お前らが何を言っているか分からんが…。ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとても んゴバっ」

そして、予想通り散っていく雄二。どうやら、川を渡ろうとしてるらしいがそれは三途の川だろう。

毒を盛った本人は気付かないんだからタチが悪い。必死の心臓マッ

サージのおかげか雄二は蘇生した。  
そんな事をしてたから、明久達はもうすぐ召喚大会の1回戦の時間だ。

「茶番を演じてる所悪いんだけど、お前ら召喚大会の時間大丈夫なの？」

当人達は必死なんだろうが、姫路に一言言えば済む問題なのに命張ってるなんてバカバカしいよな。

俺が被害に遭いそうになったら言うけど。

「え…？マズイ！早くいくぞ明久！」

蘇生したばっかだが、いち早く反応する雄二。

「喫茶店は俺達が居ない間は3人に任すぞ。頼んだ！」

3人とは、俺と康太と秀吉だろう。そう言って、教室を走って出ていく雄二。

明久は島田と姫路に、ペアチケットで誰と行くか問い詰められていた。

明久の犠牲は知ったことではないし、俺達は準備をしますか。

しばらくして、俺達も1回戦があるので秀吉に任せて教室を出た。  
パートナーは康太。

厨房は須川に任せてある。他にも教えだし大丈夫だろう。

「それでは、召喚大会1回戦を始めます」

3回戦まで一般公開も無いようなので、変に緊張もせずに済むな。

「では、召喚してください」

「「試験召喚」」

1回戦目の教科は数学だ。相手は2人ともBクラスで170点と159点か。

さて、俺達は…

《Fクラス 服部正吾 数学 338点》

《Fクラス 土屋康太 数学 41点》

「……………正直すまないと思う」

隣でボソッと呟く康太。だが、最初から分かっていたので慌てることは無い。その点数に応じた作戦をやるだけ。

相手は、康太を先に潰して2VS1に持ち込もうとしてるみたいだが

「甘いね」

康太の前に俺が出て、2人の攻撃をいなす。そして、その隙を康太が突く。

まっ、単純ですけどね。これを繰り返して、相手を徐々に削って行く。

「くっ！なんで一撃も与えられないのよ!?!」

これは、冷静さを欠いてますねえ。作戦通りですが。

焦ってる相手を一度投げ飛ばし、態勢を崩させる。そして、ここで攻勢に出る！

今まで守勢だった俺がいきなり攻勢に出て一瞬怯む相手。その隙を見逃すほど俺は甘くないです。

素早く近づき鎖鎌で斬る。

「まずは1人」

だが、

「背中がガラ空きよ!」

相手のパートナーが近づいて、剣を振りかざす。けども、

「……………お前もな」

「!?!」

その声と共に、無防備な背中に小太刀を一閃。

これはタッグ戦。こっちに意識を向けさせ、わざと隙を見せさせる。今まで手こずっていた人物が隙を見せたら思わず攻撃したくなるでしょう?そこを突いたのよね。

「勝者 服部・土屋ペア」

先生が勝者の名を告げる。

「まずは1勝ってね」

「……………（コクッ）」

決勝まであと4回。先は長いね。そんなことを思いながら、教室に帰るのだった。

「おお。正吾にムツツリーニ、おかえりなのじゃ。さっきは大変だったぞい」

教室に帰ってくると、迎えに来てくれる秀吉。

「ごめんね？大会があるとは言え、任せちゃって」

「……………（コクコク）」

「いや、そうではなく営業妨害があつてのう」

なんと。たしかに言われてみれば、客が少ないな。

たしかに、綺麗なクロスをかけてるとはいえ捲ると汚いみかん箱とこんにちはしちゃうからな。

「その事なんじゃが、雄二が『3年のモヒカンと丸坊主の常夏コン



「ビを見かけたら制裁しといてくれ」って伝言を預かったのじゃ」「分かった。それで、その雄二と相方の明久は？」

その質問と同時に秀吉の携帯から着信音が鳴る。

「明久からメールじゃ」

はて？

「『応接室近くの階段に置いていたよ』だそうじゃ。明久達は、今テーブルを泥棒してるのう」

なるほど、一度使ってしまったばこちらのモンだと。それで衛生面の対策は出来るな。

「アイツらも良くやるな。じゃ、俺は回収してしばらくしたら2回戦行くよ。康太は厨房をお願い」

「……………（ゲッ）」

「頼んだのじゃ」

さて、回収するなら素早くかつあまり人に見つからようにな。完璧に見つからないようにするのは無理だ。頑張りますか。

2回戦の試験科目は英語。俺の得意科目ってことなので、腕輪使って弱らせて康太がトドメ刺してすぐ終わったから描写は無しつと。教室に戻ると、客はほぼ皆無で見知らぬ少女がいた。とりあえず、言っておかないとな。

「この教室に少女は危険だろ」  
『どつという意味だ!!』

Fクラスのメンバーから突っ込みを受けるが、その通りだから仕方ないと思う。

「2人とも、おかえり」  
「おう。で、そのチビツ子少女は？」

康太は隙あらばカメラで撮ろうとしてるので、俺が聞くしかない。話を聞くと、島田の妹で明久の将来の嫁で姫路とも面識あり。そして、今から営業妨害をしているだろう常夏コンビを昼食を兼ねてシバきに行くらしい。そして、その場所が

「何！？短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店だと!?」  
「……………（ローアングルから）綿密に調査が必要」  
「早く行くぞ!!!」  
「……………（コクッ）」  
「そつだな!」  
「そつだね!早く行かないと!」

そつ言つて、俺達男性陣（秀吉を除く）は全力でその場所を向かつ

たのだった。  
後ろから、女性陣の罵倒が聞こえてきたが全部明久に対してだから問題なし。

「お前達、ここはやめよう」（パシャパシャ）

「却下」（パシャパシャ）

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」（パシャパシャ）

目的の桃源郷は、Aクラス【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】だった。

「そっか、ここは坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」（パシャパシャ）

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」（パシャパシヤ）

雄二が抵抗している間に、女性陣も追いついたみたいだ。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから

」

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

さっきから、撮りまくってるな康太。

「…ムツツリーニ、さっきから撮りすぎじゃない？」

「……………足りないくらい」

確かに、学校内の女子のメイド姿なんてお目にかかれるものではないしな。

「…康太」

「……………毎度あり」

さすが。このやり取りで分かるなんて。1グロス分の出費など痛くも痒くも無いわ！

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だと」

「……………1枚100円」

「2ダース貰おう　可哀想だと思わないのかい？」

全く説得力の無い説教だった。

既に現像を終えていた写真を明久に渡すとは、相変わらず仕事が早い。それが原因で明久が怒られてるが見知らぬふりとは。

「それじゃ、入るわよ。おじゃまします」

島田が1番手でドアをくぐる。

「……………おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはクールで知的な美人メイドの霧島だった。ん？なんか合図を送ったような気をしたが気のせいかな？  
女性陣が感嘆の声を漏らしている。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

明久と姫路とチビツ子（島田の妹）が中に入る。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えていた。

「…チツ」

最後に俺と康太と雄二が入店する。雄二が逃げださないよう監視も兼ねてね。

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

こんな美人にここまで言われるなんてッ！俺は思わず血涙を流しながら雄二を睨んでいた。康太も同じく、血涙を流しながら雄二を睨んでいた。

「「アンタ（康太くん）達、ホント息ピッタリね（だね）」」

そちらの声をした方向を見ると、そこには

「お、おかえりなさいませ…ダーリン」

頬を少し赤く染めた優子ちゃんと工藤が居た。隣で康太は鼻血を噴射していた。俺は、

「このメイドさんのお持ち帰り出来ますか？」

お姫様抱っこして、お持ち帰ろうとしていた。無意識って凄まじいな。

「……仕事が落ち着いたら大丈夫」

「ふええ！？代表、何言ってるのかしら!？」

よしっ！責任者の言質は取れた。これは後のお楽しみということで、昼食を頼むか。明久達は既に座ってるし。優子ちゃんと工藤は、休憩中らしく一緒に席に座ることになった。

康太は、メイド工藤の膝枕看病を受けていた。羨ましい。だが、今は昼食だ。後でどうやってもらおうか画策しながらメニューを選ぶ。

「……ご注文を繰り返します」

俺以外は、既に決まってたのか。

「…『ふわふわシフォンケーキ』を3つ、『水』を1つ、『血液パック』を1つ、『メイドとの婚姻届』が2つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ？」

動揺した叫びをあげる雄二。だが、俺の驚きは最近のメイド喫茶が、

血液パックを常備してることである。

「……では、食器をご用意いたします」

女性陣の前にはフォーク3つが、明久の前には塩が、雄二の前には実印と朱肉が、俺の前には朱肉のみが用意された。

「しょ、翔子！コレ本当にうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島は優雅にお辞儀して、キッチンへと向かっていった。

雄二を見ると、召喚大会優勝への思いをより一層強めているみたいだ。ところで

「なんで、俺のところにも朱肉があるんだ？」

「！！？」

あれ？そんなおかしいこと言ったか？俺、まだ結婚出来る年齢じゃないし。

(木下姉も災難だな)

(正吾は一度異端審問会に裁かれるべきだと思つよ)

(鈍感ばかりだわ。アキの周りは)

(ホントですね)

(ま、まだそんな関係じゃないわよ！?)

(ふ〜ん。『まだ』って事は、今後はどうなのカナ?)

こんな時に限って、俺以外が使えるアイコンタクトだと？気になるぜ。

この話題を逸らすように、明久が葉月に噂を聞いた場所を尋ねる。どうやら、ここで会ってるみたいだ。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう、2人だ。中央付近の席は空いてるか？』

噂をすれば何とやら。モヒカンと丸坊主が入店してくる。どうやらあの2人組で間違いないみたいだ。席に着くと同時に、Fクラスの喫茶店を悪口を言っている。明久が殴りに行こうとしていたが、それを雄二が宥める。

「やるなら、頭を使えってことだ　　おい、翔子お〜！」

「……………なに？」

すぐに現れる霧島。どうやら、あの連中は何度も同じことをしてるそうだ。

霧島が少し表情を歪めていた。

「そうか…よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

雄二くん…大胆だわノノ

「……………わかった」

迷いなくそれに応える霧島。お似合いカップル……………だ…な!?

「き、霧島さん!?!ここで脱ぎ始めちゃ駄目ですっ!」

「ここにはケダモノが沢山いるのよ!?!」

「わあ〜。お姉さん、胸おっきいです〜」



チビツ子の意見に同意しよう。康太、何時の間に復活した？

「…雄二が欲しいって言ったから」

止められた霧島は不思議そうな顔をしている。

「お、俺がいつお前のきているメイド服を欲しいって言った！？予備のヤツがあれば貸してほしいって意味だ！」

雄二さん、顔真っ赤にして照れてますねー。

「……今、持ってくる」

霧島が服を着直して去っていく。

この間も、常夏コンビはFクラスへの営業妨害にいそしんでいた。明久は、今にも爆発しそうだ。

「少し待ってる。女性陣の方達、櫛を持ってないか？」

「？持ってますけど…」

「ちよつと貸してくれ。他にも身だしなみ用のものがあれば全部」

姫路が上着ポケットから小さなポーチを取りだす。他の女性陣も持つてるみたいだが姫路に任せようだ。

「悪いな。後で必ず返す」

「……雄二、コレ」

ちよつどいいタイミングで霧島がメイド服を2着持ってくる。…2着？

「おう。すまないな」

「……貸し1つ」

「だ、そうだ。明久、正吾」

「分かった。御礼に雄二の人生をあげる」

「……ありがとう。服部はいい人」

「おい！シャレにならないぞ！」

だが、弁明虚しく霧島は去って行った。

「で、これどうするの？」

「俺たちに着てほしいんだって」

「ゆ、雄二！？キサマには霧島さんが居るじゃないか！？」

「……雄二。浮気は許さない……」

俺たちに着させようとしたちょっとした仕返しだよ。

「雄二。コレを着てあいつ等に制裁を加えろ。って事なんだろうけど、俺にメリツトがない」

「木下姉のメイド膝枕」

「期待に応えてみせよう」

「ちよつと!?!？」

さて、報酬もあるなら本気出さないと。

「僕は絶対に着ないぞ！正吾だけで充分だよ！」

明久が断固として反対するが

「吉井君！」

姫路が珍しく大声を張り上げる。

「吉井君ならきつと可愛いと思いますっ」

ここまで期待されちゃ裏切れないよな。うん。

明久も観念したのか、メイド作戦に渋々参加することになった。

## 第十六話

「こ、この上ない屈辱だ…！」

「明久、存外似合ってるぞ。正吾は予想以上じゃ」

雄二から連絡を受けた秀吉が、男子トイレで俺達の気付けとメイクを数分でしてくれた。俺は自分で軽くしたんだが、スイッチが入ったらしい秀吉に本気でやられたよ。

「では、ワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い」

「ん。りょーかい」

「期待してといてくれ」

そう言っつて、教室に引き返す秀吉。

「じゃ、仕方ないけど行こうか」

「先に行つていいか？ちょっとやりたいことがある。1分後ぐらいに来てくれない？」

疑問顔だったが、了承してくれた明久。せつかく、女装したんだし俺の特性の悪戯心が発動しちゃうやん？気付かれないようにAクラスに戻って…

「雄二さん、康太さん。お久しぶりです」

微笑みながら話しかける。

当然、雄二と康太とそのテーブルにいつてる奴らもキョトンとしていた。

「私の事お忘れでしょうか？…あんな事やこんな事もした関係なのに？」

テーブル内は沈黙している。が、一拍あけて…

「…雄二、浮気は許さない」

「康太くん、ちょっと話を聞かせてもらえるかな？」

クククツ…フハハハハ！！計画通り！！手を下すつてのは、俺が直接やらなくてもいいんだよ！！

俺達に女装させるといふ計画を立てた雄二。そして、その姿をカメラに収めようとしている康太。

まあ、それはいいか。康太は分け前貰えればいいし。雄二はいつものことだ。

「待て、翔子！俺の知らない人物だ！」

「……（フルフル）」

2人共、必死に弁解の言葉を述べている。おつ、明久が常夏コンビに近づいたな。俺も行くか。

「ふふつ。私達は男として健全な友達の付き合いですわよ？」

この言葉で俺の正体があったようだ。楽しかった。

さて、今まで放置していた明久の近くに行きサポート係を装う。手には箒とちり取りだ。

「お客様、足下を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

「掃除？さっさと済ましてくれよ？」

明久が言い、常夏コンビが立ち上がる。

「ありがとうございます。それでは」

「ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて」

明久のあの体勢は…バツクドロップか？

「くたばれええっ！」

「ごばああっ！」

やはりか。周りの視線が全て明久の方に行った時、視覚外の俺は好き勝手出来る！！

素早くモヒカンに近づき、鳩尾を連打連打連打。もちろん、跡が残らないようにな！

こっちに寄りかかって来たのを利用して、俺も床に倒れこむ。端から見れば、俺が押し倒されたように見えるようになっている。そして、素早く

「きゃあああ！！こ、この人、今（無理やり押し倒して）私のあらゆる所を触りました！」

「待て！バツクドロップする為に当ててきたのはそっちだし、大体お前は男　ぐはっ！」

「こんな公の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治と言う大義名分を得て雄二が登場。モヒカン？今、床とキスしてるよ。

痛打した頭をさすりながら、何か言おうとした丸坊主に追い打ちを掛ける雄二。

そして、明久。瞬間接着剤とブラを持って何するつもりだ。

「黙れ！ たった今、お前らはウエイトレス達の胸を揉みしだいてい  
たろうが！ 俺の目は節穴でないぞ！」

節穴だろ。

「ウエイトレス、そこに倒れているモヒカンを頼んだぞ」

「え？ あ、はい。わかりました」

だが、そろそろモヒカンは起きる。あまり寝てもらってたらこっち  
が疑われるからな。

「さて、痴漢行為の取り調べの為、ちょっと来てもらおうか」

指を鳴らしながら近づく雄二。こつこつ姿がハマリ役だな。

「くっ！ 行くぞ常村！」

不利を自覚してか逃げ出そうとする丸坊主の夏川。

「俺は一体…？ つて、夏川！？ なんで、ブラを装備してるんだ！？  
よ、寄るな変態！ 俺まで間違われるだろ！？」

そう言つて、2人は教室から逃げ出した。

残念ながら、床とキスしてる間にアンタもそいつと同類って認識さ  
れてるんだよね。

「逃がすか！ 追うぞアキちゃん！ セイコちゃん！」

「了解！ でも、その呼び方は勘弁して！」

「そうしたいんですけど…私、ちょっと驚いて動けないんです…」

こういつた小芝居を挟んで、より女性っぽさを演じる。それに、この後大会あるし。

それにしても、正吾の正に子をつけて正子セイコか。即興にしてはいいんではないかな。

明久が会計を気にしてるが、何も頼んでないだろ。

「…お会計は、夏目漱石を1枚か坂本雄二を1名のどちらかとなります」

「……坂本雄二に服部正吾も付ける」

「…ありがとうございます」

あれえ？俺達の価値って500円？クソツ！！康太め、俺達を売りやがったな。

だが、ここで文句を言っても仕方ない。大人の対応をしなきゃな。

「それに土屋康太も付けますね」

やられたら、やり返す。これが礼儀ってモンだ。そうだろ？

「で、3回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ。正吾達もそうみたい」



どうやら明久達も不戦勝で勝ちあがったようだ。  
もし食中毒の原因が毒団子だったら…だが、食中毒じゃすまないだ  
ろうしウチじゃないだろう。

「ならば、すまぬがこっちの建て直しに協力してくれなんか？」

「そうだな。一度失った客を取り戻すには、何かインパクトのある  
ことをやる必要があるな」

教室は空席だらけ。噂の元を断つても、それで良くなるって訳じゃ  
ない。

「ふむ。それで何をするか、じゃが…」

秀吉が教室内を見渡す。何かアイデアを探してるのだろう。

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。安直な発想だが、効果はあるはずだ」

そう言つて、雄二がチャイナ服を取りだす。

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならインパクトはあ  
るじやろう、コレを宣伝用に」

「ああ。これを 明久が着る」

「お願い、許して！メイド服の次にチャイナなんて、ホンモノって  
認識されちゃう…！」

明久が結構真剣に頼みこんでいる。

「明久…元気出せよ、な？」

「正吾：！やっぱ、頼りなるのは君…だ…よ？」

明久の語尾が段々弱くなっていた。

「え？なんで、正吾がチャイナ服着てるの？目覚めちゃったの？」

「目覚めてないから。康太が、作ったのチャイナを試着して欲しいって言うからさ」

俺の現在の装備はチャイナと茶髪のカツラである。

「これは秀吉と姫路と島田に着てもらおう。正吾は万が一だ」

「ワシもこれを着るのなの？」

秀吉が着なきや、この店は回らないと思われる。すまない、秀吉。ここで、島田姉妹と姫路が帰還する。帰って早々、俺達のメイドコスプレを絶賛してくれた。

俺は今も現在進行形でコスプレしていますが。気付いてないようだ。

「残念ながら、ただで人のコスプレを見れるほど甘くは無い」

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの為に協力してもらおうぞ」

「やれ、明久！」

明久は勢いよく、チャイナを着させるよう話しかけたが失敗していた。

だが、明久のいつも通りのスキルで説得に成功したようだ。

「チャイナのお姉ちゃん、葉月の分はありますか？私も手伝うです」

俺はお姉ちゃんじゃないんだが…。手伝ってくれるてんなら

「…………（チクチクチクチク！）」  
「あと少ししたら出来るから待ってな」

相変わらず嗅覚が鋭いな康太。その俺の言葉を聞いて喜んでるチビツ子。

雄二達の中で話が進んでるみたいだが、姫路・島田はこれを着て大会に出るらしい。良い宣伝になるな。

「行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出る2人。

「…………出来た」

「わ、このお兄さん凄いです！」

正に神速という早さで仕上げた康太。守備範囲が広いな。

だが、そのチャイナのせいで自滅するハメになるなんて思ってもいなかっただろうな。

さて、4回戦。今日の分の大会はこれで終わりだ。準決勝と決勝は

明日にやるらしい。

科目は古典で、俺達の対戦相手は…っと…

『2 A 工藤・久保ペア』

Oh…ここまで来るだけあって、やはり強敵ペアか。

「まさか、服部君と土屋君のペアが勝ちあがってくるとはね…予想外だったよ」

「そう？ボクは予想通りだったケド」

久保が話しかけてきて、それに続く工藤。

「俺は久保に同意」

「……（コクコク）」

それに合わせて返答する俺。本来、俺は出る予定無かったし。

『では、皆さん良い試合をお願いします』

話が終わるタイミングを見計らって、開始の合図を送る立会人の先生。そう言えば、4回戦から観客もいるんだっけか。どうでもいいが。

《2 - A 久保利光 古典 430点》

《2 - A 工藤愛子 古典 331点》

対して、

《2 - F 服部正吾 古典 402点》

さて、どうしようか。康太は一撃でも貰うとアウトだな。かと言って、高得点者複数且つ1人は腕輪持ち相手に立ち回るのは厳しいだろう。

「考え事してるみたいだけど…こっちから行くよ?」

工藤がそう言っつて、俺に向かって突っ込んでくる。素早いがかわせないっつて訳ではない。何度か、お互いの得物がぶつかり合う。久保の方は、俺達の戦闘領域から少し離れたところに居る。康太は俺の後ろの方で待機。

「久保の腕輪は遠距離技つてトコか?」

「!?!」

なぜ分かった!?!つて、ような顔をしてるな。分かりやすいぜ。観客もいるし、少しサービスつてことで。

「康太を放っておいて、俺に1VS2を仕掛けてるクセに近距離で同時に攻撃してこないのは2人の得物がデカイからだろ?久保が鎌で、工藤が大斧だしな。卓越した操作技術があれば別だろうが。で、それしか作戦がないならその作戦を使うだろうが、他に確実性がある作戦があるなら普通はそちらを使うだろうよ。わざわざ、腕輪持ちを後衛に配置して隙を狙ってるんだしな」

「…少しの戦闘でよくそこまで分かったね?」

こっぴつこの慣れてますし。

「やっぱり、服部くんは要注意だったね」

「バレてしまったらしょうがない。2人で近接戦でいかせてもらおうよ」

そう言つて、久保も得物を構えて近づいて攻撃を仕掛けてくる。だが、俺の予測通り攻撃の鋭さが若干鈍っている。召喚範囲の隅っこに陣取つてて良かった。背中を気にしないでいいつてのは大分楽だな。

《2-A 久保利光 古典 230点》

《2-A 工藤愛子 古典 157点》

《2-F 服部正吾 古典 320点》

戦闘中の点数が表示される。ここまで、減らせば上出来か。ここで作戦を用いる。

康太が俺の後ろから飛び出し、工藤に飛び掛かる！

「焦っちゃったかな、康太くん？懐がガッ」工藤！」な、なにカナ！？」

大声で俺が工藤に呼び掛けて一瞬の隙を作る。その間に康太が工藤の動きを封じる為に抑え込みにかかる。

康太が鼻血を出してるのは内緒だ。

「流石にその点数差じゃ抑え込みは厳シ」……正吾「えっ？」

元々抑え込めるなんて思つてないさ。康太諸共工藤を倒せる隙を作つてもらつただけだ。

背中から刀を抜いて突き刺す！

《2-A 工藤愛子 古典 0点》

「工藤さん！」

「戦闘中によそ見とは随分余裕じゃないか？」

「しまっ…！」

久保に近づき、攻撃を加えてふっ飛ばし追撃で棒手裏剣もプレゼントしといた。流石に耐えられないだろう。

『勝者 服部・土屋ヘア！』

勝者を告げる宣告が響き渡る。なんとか勝利出来たか。さて…この後は重大なお仕事があるから準備しないと…

「いや〜、まさか康太くん諸共攻撃するとは思わなかったよ」

「そういう所も含めて完敗だったよ」

ステージを降りてきた所で話しかけて来たのは、先ほど戦った久保と工藤。

「康太がこの作戦を決行することを望んでくれたからね。じゃなきゃ負けてたよ」

いかに、どちらか一方を倒して1VS2もしくは1VS1に持ちこめるかが重要だった。

ホントは、久保を抑え込んで欲しかったが男は無理という希望があったしな。

実際のところは

「（康太はさっき召喚獣にしたことを本人にもしたらしいよ？）」

「ふえ！？ま、まだ早いよ！？」

工藤にしか聞こえないぐらいの音量で呟く。さっきしたこととは抑え込みだ。

工藤を見ると、顔が茹でダコみたいに真っ赤だ。俺の中で自称実践派は実はピュア疑惑が浮上した。

「じゃ、俺は急ぐからお先に……康太、頼んだぞ」

「ッ！！……（コケッ）」

康太まで巻き込むのは悪いが……このお仕事の失敗は許されないからね。



## 第十七話

「多分、そろそろ仕掛けてくるハズだと思うんだが…」

明日の確認を学園長室で話してきた僕と雄二なんだけど…

隣で雄二が不穏な言葉を呟いている。仕掛けてくるってなんだろう？

「……雄二」

教室の前まで戻ってくると、ドアの前に立っていたムツツリーニが駆け寄ってきた。

「ムツツリーニか。何かあったのか？」

「……ウェイトレスと遊びに来ていたAクラス3人組が連れて行かれた」

「ええっ！？ 姫路さんたちが！？」

どうして次から次へと！何が起きてるんだ！

「やはり俺達とやりあっても勝ち目がないと考えたか。当然といえば当然の判断だな」

雄二の呟きが聞こえてくる。やり合っつてケンカかな？僕はともかく、雄二は勉強をサボり続けた分、身体を鍛えまくっていたからなあ。

「ってそんなことより、姫路さん達は無事！？何処に連れてかれたの！？相手はどんな連中！？」

「落ちて着け明久。これは予想の範疇だ」

「え？そうなの？」

「ああ。もう一度俺たちに直接何かを仕掛けてくるか、あるいは喫茶店にちょっかいを出してくるか。そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくることは予想できたからな」

だが、翔子達も連れてかれるのは予想外だった。と苦い顔をしながら付け加える雄二。

そういえば、僕はチンピラ達に襲われたんだ。雄二に任せて助かったけど。

「なんだか随分と物騒な予想をしてたんだね」

「引つかかることが随所にあつたからな」

そういえば、最近の雄二はたまに考える素振りを見せていた。その時から違和感を抱いていたのだろう。

話を戻して、ムツリー二がなぜか持っていた盗聴の受信機で姫路さん達が連れて行かれた居場所が分かるらしい。

「さて、居場所がわかるなら簡単だ。お姫様たちを助けだすとしてもしょうか。王子様？」

「それは雄二もだと思っけど？」

痛いところを突かれたのか、顔を背ける雄二。ほんとに素直じゃないな。

「ま、今回は雄二に感謝するよ。姫路さん達に何かあつたら、召喚大会どころの騒ぎじゃなかったからね」

「…それが向こうの目的だろうな」

「え？」

「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムツリー二。タイミ

ングを見て裏から助けてやってくれ。あと、ここに居ない正吾に連絡も頼んだ」

「……わかった」

そういえば、正吾がいないじゃないか！こんな状況だから忘れてたよ！Aクラスで、40人以上のクラスメイトを殲滅した正吾が居れば正直頼もしい。

「正直、アイツも（……………）……」

雄二がまた何か呟いている。だけど、それより今は次に何をするかだ。

「僕らはどうするの？」

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

茶目っ気たっぷり目の目がこちらを向く。

「役目って？」

「お姫様を攫った悪者を退治することさ」

『さて、どうする？坂本と吉井だったか？そいつらをこの人質を盾に呼び出すか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本つてのは中学時代は相当鳴らしていたらしい』

『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『ああ。出来れば事を構えたくないんだが…』

『それは分かるがそもいかないだろ？依頼はその2人を動けなくすることなんだから』

ムツツリー二の持っていた受信機から、そんな会話が聞こえてきた。それより依頼つてことは？

(ああ。黒幕に依頼されたそこのチンピラだろうな)

ムツツリー二に案内されたのは、学園から歩いて5分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに連れて行かれたらしい。

しばらく聞いていると、連れてかれた姫路さんや美波たちの声や吐き気すら覚える外道の声が聞こえてくる。人数は7人、8人？だが、そんなことはどうでもいい。今すぐ黙らせてやる。

(待て、明久。気持ちは分かるが、まずは人質の救出が先だ、ムツツリー二がうまくやるまで待て)

(…分かったよ)

雄二を見ると、爪が食い込んでるんじゃないかというほど拳を握りしめている。

ああ、雄二も耐えてるんだ。ムツツリー二がうまくやるまで待とう。ムツツリー二が潜入したが、外道どもは話を進めている。それに抵抗する姫路さんや美波たちに対して

『あーもう。うつせえ女だな！』  
『きゃあっ！』

ドンという何かを突き飛ばした音と美波の悲鳴。その数秒後遅れて聞こえたのは、ガシヤアアンという何かテールを巻き込んで倒れたような音と、女性陣の想い人であると思われる男性の名前を呟く小さな声だった。

(…雄二)

(…ああ)

「絶対にブチのめす」

雄二と同じ気持ちだったか。これは良かった。なら

「おじやましませーす！」

「邪魔するぜ」

とりあえずドアを開け放って部屋に入らないとね。

「よ、吉井君？」

「アキ…」

「……雄二」

中では予想通りの光景が広がっていた。

「ハア？お前誰よ？」

入口付近に座っていたチンピラAが話しかけてくる。まずはこいつからか。

「それでは、失礼して…」

彼の手首を軽く握り、

「死にくされやああ！」

股間を蹴りあげてやった。雄二は顔面にストレートを喰らわせていた。

相手はそれを喰らい白目を剥いて失神している。

「テメエ等、ヤスオになにしゃがる！」

近くに居た男に顔面を殴られる。口の中が切れたのか、血の味がする。だが、それがどうした！

お返しにハイキックを喰らわせる。雄二の方は、確実に敵を沈めていたが…いかんせん敵が多い。

「たった2人で調子くれんなよ！」

「舐めてんのか！」

「ぶち殺すぞ！」

さすがに相手も冷静さを取り戻したのか複数で囲んでくる。クソッ…分が悪いな。

だけど、そんな状況から僕らを取り囲んでいたチンピラから悲鳴が聞こえてきた。

「ぐふっう！」

「て、てめえ！なんだ…げぶっつ！」

こんな状況で仲間割れ？いくらなんでもおかしい。これは僕でも分

かる。

疑問に思っていた僕と雄二に答えるように、その方向から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「王子様達、不利そうだけど手を貸そうか？」

いやあ、随分と大人数に囲まれてますな明久達。

事前にチンピラ共の人数潰しといたんだけど、なんか増えてるな。まさかゴキブリだったり？

「テメエ！下っ端のくせに裏切りか！？」

明久達を取り囲んでいたチンピラ達が喚いている。おいおい、戦闘中だぜ。そんな事言ってる暇あるのか？

近くにいた奴の股間に飛び膝蹴りをかます。浮足立ってる相手に威嚇も兼ねて。

「！！！」

そして、その光景を見て股間を抑えてる奴らには洒落にならない大技を決めていく。だって、両手が股間にあってガラ空きなんだもん。

いい実験台になる。

「雄二。別に疑いを持つのは構わないけど、今はこの場を乗り切るのが先決だと思うけど?」

「…そうだな」

これで悪鬼羅刹の雄二も動き出す。それに釣られて明久も奮闘するだろう。

俺も一緒に狩りますか。逃げられたら意味がない。

「さて、外道どもは粗方片付いたかな?」

明久、それフラグじゃないか?

「お、お前ら!こ、コイツらがどうなってもいいのか!?大人しくしろよ?さもないと、ヒデエ傷を」

床に倒れ伏せていたはずのチンピラが女性陣の後ろに回り込んでおり、人質に取ろうとしていたが

「……負うのはお前」

「あがあっ!」

クリスタルの灰皿を振り切って、チンピラを殴り倒した康太。有言実行とはさすが。

「吉井君っ!」

「アキ!」

「明久!」

「…雄二!」



「正吾！」

「康太くん！」

救出されたお姫様達（1人は秀吉）が各々の名前を呼ぶ。だけど

「感動の再会って所悪いけどさ。ここはこいつらの息が掛かってる  
カラオケボックス  
から早く学校に戻った方がいい。後始末は俺がやるとくから」  
「…俺も残ろう」

ここに居て想定外のことが起こるかもしれないし。雄二は俺を疑ってるから監視つてとこだろう。残りのチンピラ共へのストレス発散も兼ねてだろうが。

「ということだ。康太、明久。お姫様達の護衛は頼んだ」

「……わかった」

「任せて」

頼もしい返事を得られる。

「それじゃ、後で学校で会おうか」

誘拐騒ぎを解決して、やることがあると云って雄二とも分かれた俺。別れ際に、『今までのことを吐いてもらうからな。用事が終わったから教室に來い』なんて、言われたのでFクラス教室へ向かっていた所だ。

窓から教室内の様子を覗くと、雄二・明久・康太・秀吉・姫路・島田・霧島・優子ちゃん・工藤・バアさんがいる。全員、この事件の関係者か。それにしてもなんか空気が重いな。

「お邪魔しまーす」

『!?!?』

ここ3階だし、窓から現れたら驚くか。そろそろ慣れてほしいんだけども。

事前を買った缶コーヒーを飲み一息つく。

「やっと来たか、正吾。単刀直入に聞くが、お前は何者だ？」

「んー。ちよつとお茶目で純情な高校生かな」

「惚けるな。お茶目で純情な高校生が全身に武器を仕込んだり、闘い慣れてたり、事件の後始末に手慣れすぎているなんてありえないだろ」

この雄二、本気である。周りの奴らも真剣な眼差しでこちらを見てくる。

こういうのダメなんだよな。

「俺の事はどうでもいいだろ？」

「チツ…話を逸らしやがつて。まあいい、お前は俺達の味方か？敵か？」

「…まあね」

この状況で「味方です！」って言って素直に信じるのは明久と姫路ぐらいだろう。

「ここ最近、お前は妙に怪しい動きを見せてたのはなんでだ？」

「怪しい動き？俺の動きって怪しいの？」

「だから、惚けるな。普段から隙を見せないお前が、放課後になると途端に分かりやすいように隙を見せていた。まるで、俺たちになざと警戒させるようにな」

「勘違いでしょ。それに」

雄二の態度から察すると、

「どうせ康太から聞いてるんだろ？そろそろ、このやり取り面倒くさくなった」

俺のこの言葉を聞いて、場が静まるが…しばらくすると、笑い声が聞こえてくる。ここって笑うシーンか？

「ムツツリー二の言った通りじゃな」

「親友なだけはあるね。2人とも」

「ある意味嫉妬しちゃうかな」

「羨ましいですね」

え？何という状況なの？状況を呑みこめてない俺に優子ちゃんが説明をしてくる。

「正吾が帰ってきたら尋問しようって事になってね？内容と、その内容に対する正吾の応答が土屋君のほぼ予想通りだったって訳」

ふむ、なるほど。それは凄く恥ずかしい。言動を読まれるってよく

ないね。

「そういうことだ。正吾が竹原と手を組んだり、この誘拐騒ぎが起こるって事を知ってたって聞いた時はぶん殴ってやるうかと思っただがな」

「裏で色々と手を回してくれてたんでしょ？チンピラ達も半数以上潰してたようだし、それに徹夜で情報集めてたみたいだし」

「葉月を予め避難させてくれたようだし…感謝するわ」

なんだろう。凄むず痒いですわ…

「…お前らお人よし過ぎ。お兄さん、お前らの将来が心配になるよ」  
「…照れ隠し」

康太君。そういうの言わなくてもいいからね。

「まあいい。ここから俺が仕切らせて貰うが今回の騒ぎ、そのバアさんから話を聞いてると思うが」

「話題逸らしたね」

「逸らしたな」

「逸らしたのう」

落ち着け。落ち着くんだけ俺。

「今回の事件の発端は腕輪が未完成で、それを暴走させて学園長を失脚させたい教頭とそれを阻止したい学園長のいざこざから起きたって訳だが…腕輪は1回なら霧島レベルの点数でも耐えられるように調整しといた。だから棄権しなくても大丈夫だと思っぞ。霧島と優子ちゃん、誰と行くが分からないがペアチケットの為に頑張ってくれ」

『!?!?』

「そ、それじゃあ、僕たちが優勝しなくても霧島さん達が勝ち進めば明久、お前ももう1個の方忘れたのか？それにペアチケットだけは阻止せねばッ!！」そうだった!！」

もう1個とは姫路の転校の件。クラス内にレベルの高いクラスメイ  
トがいるという事を証明することだ。

脳が情報を処理しきれず色々飛んでるみたいだな。

「そういう事だ。それぞれの思惑があるだろうが4人と準決勝頑  
張ってくれ」

「お前達の相手は常夏コンビか。あまりやりすぎるなよ(ニヤッ)」「  
あいつらは色々やってくれたけどな。ほどほどにしてやるさ(ニ  
ヤッ)」

あの2人って悪役ピッタリだね。なんて声は聞こえない。それは雄  
二だけだ。

「言う事はこのぐらいか？あと信じてもらえるか分からないが俺と  
竹原が手を組んだという話だが、さっき破棄してきた。だが、証  
拠は……録音済み」マジか」

そう言つて、康太が再生ボタンを押す。

何時の間に録音されてたんだよ。徹夜で注意力不足だったのか。実  
力不足だったのか。はたまた両方か。

『お邪魔しまーす、竹原教頭』

『…よくのこと私の前に顔を出せましたね？服部君』

『え？何の話ですか？アンタの妨害を妨害してたことぐらいしか記  
憶にないんですけど…』

『その事に決まってるだろツ！！散々、私の邪魔をしてくれやがって！！』

『おいおいおいおい、いい年して喚くなよオツサン。飼いだと思つてた犬に手を噛まれるのはどんな気分だい？』

『最低最悪な気分だよクソツ！！犬どころか貴様は蛇だ！！』

『オツサン、面白い事を言うね。古来より蛇を神の使いとして崇める風習があつたらしいし、アンタを駆逐するよう俺は神に使わされたってこと？これ、狙って言ったのかい？なら感心しちゃうよ』

『ふざけてんのか！！クソツ！！万全を期したつもりだったが、こんなクソガキに邪魔されるとはツ！！』

『ぶぶぶつ。猛毒な蛇に不用意に近づいたアンタが悪いと思うよ？自業自得じゃない？』

『クソガキイイイ！！ぶつ』殺す？アンタが斬り付ける前には、既にこの世とオサラバさせてあげれると思うけど続ける？』：チツ』

『物分かりの良い先生で良かったですよ。俺、今物凄く機嫌が悪くてね？テメエの下らないままごとに、周りを危険な目に合わせつつやった自分が余りにも不甲斐無くて、制御できそうにもないところだつたんですよ』

『……とつとと出ていけ！！貴様の顔など見たくもない！！』

『そのセリフそのままお返ししますよ。ではまた……常夏コンビが優勝できると思いますね（笑）』

『……チツ！』

うはっ。これはなんて拷問。新たなプレイですか。

「……………正吾」

沈黙を破って話しかけてくるのは康太。

「……………いつもより温い」

「やっぱり？まあまだ、二の矢三の矢があるから抑えてあげたんだけど」

「……ならいい」

「どこが！？」

女性陣はどうやらやりすぎ、みたいな意見のようだが俺達Fクラス男子（秀吉除く）は違う。

「そうだね。やられたらやり返さない」と

「ああ。それぐらいは当然だ」

やっぱりFクラスは血気盛んですな。これは頼もしい。さて、明日は忙しくなりそうだ。

「アンタたち、明日は頼んだよ」

「はい」

そういえば、バアさん今まで空気だったな。忘れてたよ。

## 第十八話

さて、今現在俺は登校中で木下姉弟を迎えに歩いているところだ。

昨日の誘拐騒ぎもあつたことだし、護衛ということだ。康太は工藤を迎えに行き、俺達と合流してそこから更に姫路と島田とも合流する予定だ。明久と雄二はテストを受けるとのことで、既に学校に行つてるようだ。もちろん、霧島はそれについていつてる。

この説明を終えた頃に、ちょうど着いたようだ。玄関前に既に2人は待機していた。なんというご都合主義だろうか。

「よう。2人とも。昨日はゆっくり休めたか？」

「おはようなのじゃ。大丈夫じゃったぞ、正吾…？」

「おはよう。アタシも大丈夫…？」

2人が俺の顔を見て硬直する。正確には『目』と『目の下』か。俺も鏡見た時驚いた。

「正吾！？お主、目が物凄く充血しておるぞ！？それに隈も凄いのじゃ」

「ちよつと！？アンタの方が危ないじゃない!？」

「俺は大丈夫だ。最近より一層仲良くなったブラックコーヒーを持参してきたからな」

そう言つて、2Lの水筒（innocohi）を3本見せる。

「正吾。お主、（姉上の為にも）もう少し身体を労わるべきじゃ」

「？ まあ、気をつけるよ。今日が終われば、しばらく休めるだろうし」



「そ、それじゃ行きましょ」

そうだね。話すのは歩きながらも出来るしね。他愛もない話をしながら、合流地点に辿り着く。そこには、康太と工藤ペアがいた。

「おはようなのじゃ」

「おはよう、愛子と土屋君」

「おっす」

木下姉弟と俺が挨拶の為に、声を掛ける。それに気付いた康太と工藤がこちらに振り返る。

その康太と一瞬目が合ったが…これはヤバイ!!

康太の野郎、俺を不審者と認識してボールペンやカッターを投擲するつもりだ!!

俺は折り畳みナイフを素早く構え、飛来してきた物体を斬り落とす。

「随分なご挨拶じゃないか…康太くんよお」

「……!!不審者かと思った」

だが、仕方ない。自分でも驚くほどなんだ。他人が驚くのも無理がない。

誤解が解けたので、姫路と島田との合流地点へ向けて歩き出す。

「それより服部くん?その武器は何処から取り出したのカナ?」

興味津津といった様子で聞いてくる工藤。

「口から。清涼祭期間だからなのかFクラスなのか分からないけど、チエック厳しくてさ。取り出しやすい場所にセット出来なのが痛い。」

緊急事態で使えなきゃ意味がないのに」

他には、靴底や髪留めだが言わなくても良いだろう。

「特に厳しいのは、明久と雄二とムッツリー二と正吾じゃな」

「……心外」

「アンタたち、どんだけマークされてるのよ……」

「やっぱり、Fクラスのみんなは楽しそうだね」

いつも騒がしい分、たしかに楽しいけどな。そんな事を話しながら、合流地点へと向かったのである。

「きゃあっ！……って、服部君ですか？」

「何よアンタ！……って、服部じゃない」

どうせそんな事だろうと思ったわ！

学校について、Fクラスに入ると案の定、明久と雄二の襲撃を受けた。返り討ちにしてやったけどな。

そんな事は置いといて、朝から準決勝があるんだったな。昼には決勝。分けた方が客が入るんじゃないかね？って発想だと思う。正直どうでもいい。

準決勝に向けて、明久と雄二は教室を出ていくみたいだが。俺はもう少し休んでから行くでしょう。

会場に設置したカメラで状況を見れるしな。試合が終わってから移動しても間に合うだろう。明久達と俺達の試合の合間は10分ぐらいいあるからな。

よう、俺だ。今は準決勝第2試合の為にスタンバイしてるところだ。明久・雄二ペアVS霧島・優子ちゃんペアの戦いはどうなった？結果から言うと、明久・雄二ペアが勝ったよ。

雄二の作戦では、優子ちゃん自体を秀吉とすり替えて3VS1、もしくは2VS1に持ち込むつもりだったみたいだが、とつくに看破されていた。霧島が絡むと途端に弱くなる雄二（笑）

そこで、明久が即座に策を考え、秀吉が雄二の声を真似て霧島を召喚獣を召喚させずに陥落させた。

で、あるうことが優子ちゃんに対しては戦闘中に俺の声を使用し、隙を作りだした所を明久が手数で押し切ったワケだ。秀吉が居なかつたら負けてたな。

こんな説明が終わったところで、そろそろ俺達の試合が始められる準備が終わったようだ。ご都合主義だな。

さて、気を抜かずに叩きのめしてやりましょうか。

ふう…危なかった。秀吉が居なかったら僕達が負けてたよ！まったく、雄二は異性（特に霧島さん）が絡むと使えないんだから。

試合が終わって、雄二と一緒に霧島さんと秀吉のお姉さんと話したところ、正吾が僕達の方にやってきて、何か小型のテレビみたいなのを渡してきたんだ。で、渡した本人は、

『これで試合観戦出来るから、ゆっくり休めるところで見ててくれ。それと、4人ともお疲れ』

って、言っただけかな足取りで会場に向かっていった。正吾の事だから、ここに観客と一緒に残って観戦するより、時間を無駄にしないようすぐ寝れる場所で見ろって事なのだろう。

正吾は、面倒見がいいよね。本人に言ったところで飄々とした態度で否定するだろうけど。

雄二も思惑に気付いたようで、

「あの世話好きヤローが……好意に甘えて、屋上で見るか明久」

なんて言ってる。お昼ぐらいまでは休むって美波達の言っているので大丈夫だろう。

特に否定する要素も無いので、その言葉に同意した。そして、霧島さん達もついてくるみたいだ。人が少ない所で見れるなら、そつちのがいいもんね。

「それじゃ、行こっか」

僕の言葉に特に異論は起きず、屋上に向かうことになった。

途中で工藤さんも合流し、5人で正吾達の試合を見ることになった。屋上に着いたと同時にスイッチを入れる。屋上には放送機材があり、人は居ないようだし、座って見れる。

「翔子。なぜ俺の膝の上に座ろうとしてるんだ？」

「…恋人同士なら当然」

「恋人じゃないからなっ!？」

チツ…。羨ましい野郎だ。近くに霧島さんが居なかったら、殺しにかかっているとこだ。

画面に意識を戻すと、ちょうど選手入場シーンだ。準決勝ってこともあり、司会にも熱が入っているなあ。僕達の時もそうだったけど。正吾とムツツリー二の相手は常夏コンビだ。散々、僕達の喫茶店の邪魔をしてきた3年生コンビである。ちなみに、3年Aクラスと頭はいいみたいだ。頭はね。

『先輩方。愉快的小細工はもういいんですか?』

画面から、小馬鹿にしたような正吾の声が聞こえてくる。

「正吾って、こういった態度が様になるよね」

「珍しく明久の意見に同意だ」

「…うん。雄二みたい」

「そうね。代表の意見に同意だわ」  
「ボクも同意だね」

僕も霧島さんの意見に同意だ。

だが、周りが盛り上がってるのにこんなに音質がいいなんて…ムツツリ商会の機材のレベルは高いな。

『お前らが公衆の面前で恥かかないように、という優しい配慮だったんだがな。Fクラス程度じゃ理解できなかったか？』

応える坊主先輩も負けていない。お返しとばかりに仕草で挑発し返していた。どちらも相手を苛立たせるのが上手い。僕だったら、すぐ挑発に乗ってしまうかもしれない。

『サル川先輩は日本語で話してくださいよ。それより、3 - Aのお化け屋敷でしたっけ？客足が途絶えてるみたいですね』

『て、テメエ！！先輩をサル呼ばわりしやがって！！』

『夏川！落ち着け……そうだが、なんでテメエが知ってる？』

坊主先輩の挑発を軽くあしらって、自分のペースに持ち込んでいる正吾。正吾の方が1枚上手のようだ。

『風の噂ですけどね？3 - Aのお化け屋敷に入ると、いきなり押し倒されてブラを剥ぎ取り、その拳句にそのブラを頭部に装着するモヒカンと丸坊主が居るって聞いたんですよ？そんな人外鬼畜な常村と夏川がいたら、客足途絶えるだろうなあ、って思いました』

『そ、そんな噂が流れてるのか！？』

『テメエ今、さり気なく呼び捨てにした拳句に人外鬼畜扱いしやがったよな！？』

そんな噂があるの！？昨日は誘拐騒ぎがあつて、それどころじゃなかったら知らなかったよ。

雄二達も知らなかったようで驚いている。

『そんないきり立たないで下さいよ気持ち悪い。謝ればいいんですか？ゴキ村先輩、ブリ川先輩。せつかく人が客足途絶えた原因を心優しく教えてやったのに、態度が悪かったみたいなので渋々謝つてやります。ごめんな（笑）』

『て、テメエ…！！俺達をゴキブリ扱いしやがつて上にまともに謝つてねえじゃねえか…！！』

『噂を流したのはテメエだろ…！！ツラ貸せ…！！』

先ほどの言葉を訂正しよう。正吾の方が2枚も3枚も上手のようだ。正直、常夏コンビに同情を禁じえない。そんなことは有り得ないけど。

『いやいや、俺はゴキブリ先輩達みたいに馬鹿丸出しな営業妨害をするほど暇じゃないんですよ。ブラを頭につけたままの状態を客に見られたんじゃないですか？それに2・Aでも、痴漢行為を働いたらしいじゃないですか？そりゃ、そんな噂が流れても自業自得ですつて。ぷぷぷ』

『クソがッ…！！』

『ハッキリとゴキブリ扱いしやがつて…！！』

うわー…かなりえげつない。雄二でも、ここまでやらないんじゃないかな？

隣で雄二は『あいつは敵に回しちゃいけない人種だな』つて呟いている。霧島さんと木下さん、工藤さんもその言葉に頷いている。

『高校生活最後の清涼祭を邪魔された3・A生徒一同から、徐々に

ハブられかけてるゴキブリ先輩達、不憫だろうが頑張ってる残り的高校生活楽しんでください……えっ？元々ハブられかけてるって？すみません…本人達も気にしてる事を言ってしまうって…常村先輩、夏川先輩ごめんなさい』

『テメエ！！急に優しく語りかけてくるんじゃないやねえよ！！リアルっばいじゃねえか！！』

『ハブられてねえよ！！クソツ！！てめえは絶対にぶちのめす！！』

完全に常夏コンビは冷静さを失ってるね。ちなみに、ここまでの正吾は笑顔を絶やさず言っている。

正吾、恐ろしい子！！

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

説明が終わったのかちょうどいいタイミングで司会兼審判役の先生がそう告げる。

『『試験召喚』』

『Aクラス 常村勇作 保健体育 267点』

『Aクラス 夏川俊平 保健体育 250点』

Aクラスに所属しているだけあって、点数はかなりのものだ。しかも3年にとっては受験もあるし、保健体育は正直疎かになりがちだろう。

『どうした？俺たちの点数を見て腰が引けたか？』

『Fクラスじゃお目に掛かれないような点数だからな。無理もないか』



冷静さを取り直したのか、誇らしげにディスプレイを示す常夏コンビ。確かに誇ってもいい点数だろう。ただ、僕達5人は画面を見ながら笑っている。なぜかって？それはね？

『確かにAクラスに恥じない成績ですね。だけど』

《Fクラス 服部正吾 保健体育 541点》

《Fクラス 土屋康太 保健体育 603点》

Fクラスが誇る最強の矛の1つだからだ。あの正吾・ムツツリーニペアが保健体育で組んで負けるはずがないだろう。

『なっ!?!』

『上には上が居るもんだよ?…行くよ、康太』

『……待ちくたびれた』

そう言っただけはお互いの得物を構える。

あれ?ムツツリーニの腕輪…たしか『加速』を使えばすぐ終わらせられると思うんだけど?

僕の疑問を余所に、四者はお互いの得物で何度も何度も打ち合う。

《Fクラス 服部正吾 保健体育 478点》

《Fクラス 土屋康太 保健体育 502点》

『……えっ!?!』

あんなにあつた点数が何時の間にか削られている!?腕輪を使ったけどハズしたとか?けど、見ている途中で2人とも腕輪を使った様子は無い。まさか、常夏コンビは相当な操作技術があるのか!?

「ゆ、雄二…これってマズイんじゃない？」

思わず、雄二に同意を尋ねてしまう。霧島さんと木下さん工藤さんも心配そうに試合を見てるが、雄二は苦笑いしながら、

「あー…大丈夫だろ。試合見てる限り」

どうして！？こうやって話してる間も、正吾とムツリー二の点数は徐々に徐々に削られていた。

対する常夏コンビは200点弱。

「常夏コンビの表情をしてみる」

こんな状況でなんで？だけど、僕から話を振ったんだ。仕方なく、画面に映っていた常夏コンビを見る。

その表情は、焦りや怒りを含んだ表情を浮かべていた。

どうしてだ？試合を見ると、常夏コンビが有利に進めてるように見えるのに。

「恐らくだがな。正吾とムツリー二は苦戦してないぞ」

「…えっ？」「」

「言い方が悪かったな。あいつらは苦戦しているかに見せかけてるだけだ」

「…どうして？」

霧島さんが、僕の疑問引き継いで話を進める。よかった…疑問に思ったのは僕だけじゃないんだ。

「さっきの試合を思い出してみろ」

さっきの試合…？

「簡潔に言えば、坂本君と代表は召喚獣を召喚せず、吉井君は半ば不意打ちと言われるような形でアタシの召喚獣を倒した。ってトコね」

冷静に振り返ると中々酷い試合だ。

「この学園の特徴でもある『試験召喚システム』のお披露目も兼ねてるのに、片方は召喚せず片方は不意打ちであり時間を掛けずに試合を終わらせた。すると、観客や来賓の印象はどうなる？」

「最悪、ってまでは行かなくても、あまり良い印象は持たれないね」

「その通り。だから、あいつらは試合を長引かせて接戦を演じてるんだ」

けど、それで試合に負けたら意味がないんじゃない？雄二に説明されたけど、ここまでの試合ぶりを見てみると、ちよつと心配になるな。これが演技って言われても、すぐには信用できないよ。

画面に目を戻すと、常夏コンビが勝負を決めようと突撃を仕掛けてようとしていた。

『さて、撒き餌も撒き終わったし…ド派手に決めようか』

『……（コクッ）』

『それじゃ…《分身》』

そう言って、正吾は腕輪のキーワードを呟く。

どこからともなく正吾の手裏剣が増えて、それを常夏コンビに投げまくる。

だけど

『ナメンじゃねえよ！！』

常夏コンビの召喚獣はそれをかわす。これはまずいんじゃないか！  
？伊達に、1年長く在籍してる訳じゃない。

やっぱり、すぐに倒すべきだったんだって！！

『避けて貰わなきゃ、ここまで長引かせた価値が薄れるんだよね』

『ハッ？減らず口叩けるのもそこまだ』…加速』…はっ？』

ここで、ムツツリーニが腕輪のキーワードを呟く。

手裏剣を避けた敵は丁度、ムツツリーニの直線状にいる。まさか、  
手裏剣はこのポイントに移動させるための罠！？

敵もそれに気付いたようだが遅い

『ぐあっあ！！』

ムツツリーニの小太刀が一閃！！常夏コンビの召喚獣が空中に吹き  
飛ばされる。

だけど、トドメが浅かったのかまだ試合終了を告げる宣告が会場に  
響き渡らない。

ムツツリーニ！！ここで、ミスを冒すなんて！

『……正吾』

『任せとけ』

だけど、ムツツリーニは慌てずに隣に居る相棒に声を掛けた。まさ  
か、これも作戦の内？

常夏コンビの召喚獣が床に着地すると同時に

ドカアアアン！！

「!?!」

想定外の爆音がけたたましく響き渡る。え？なにがあったの？

煙が晴れ、召喚フィールドに立っているのは正吾とムツツリー二を召喚獣のみ。

まさか…撒き餌って、この爆弾のこと!?!それに、常夏コンビの召喚獣が姿を消してることとは…オーバーキルなダメージを与えたのか!?!もし、僕の召喚獣が喰らったと思うとぞっとするよ。

『勝者 服部・土屋ペア!』

勝者を告げる宣告が響き渡る。それと同時に周りの観客も歓声を上げる。

凄い盛り上がりようだ。僕達の時とは比べ物にならない。

女性陣も声を上げて喜んでいる。特に木下さんと工藤さん。

「時に明久。さっきの話には続きがあつてな」

「?」

恐らく、接戦を演じてるって話かな。

「そつだ。これで観客や来賓へのアピールも成功したし、こんな接戦を演じたことは注目を浴びる。つまり、俺達の喫茶店のアピールにも繋がるってことだ」

かなり良い事づくめじゃないか！

「……だけど、更に続きがある」

「まだあるの？霧島さん」

霧島さんがタイミング良く話を繋げる。ホント、いいカップルだ。まあそれは置いて、これ以上、良い事があるの？

「そうだ。ムツツリー二の召喚獣は分からないが、正吾の点数の減りはおそらく腕輪によるもののみだ。バレないように展開してたんだろう。そうでもしないと、あの大量の爆弾は説明できない」

たしかに。オーバーキルさせるほど仕掛けてたなんて今思い出してもゾツとするよ。

「……全部、服部のシナリオ通り。相手の2人は道化扱い」

「常夏コンビは相当頭に来てるだろう。後輩で、しかも、バカにしていたFクラス相手に手玉に取られたんだからな。Aクラスってこともあり奴らはプライドも高そうだしな」

「純粹に良い勝負だったと思って拍手を送る観客達。それを甘んじて受け取らなければいけないって、相当な屈辱よね」

こうやって聞かされると、常夏コンビは一瞬で倒された方がよかつたよね…

にしても、点数差があつたとはいえ、3年のAクラスを手玉に取つた正吾達と決勝か…勝てるかな？

そんな事を考えていると…

「ケド、優子はそんな計算尽くめな服部クンの事が気になるんではない？」

「なっ…！？」

工藤さんが突然、そんな事を言い出す。木下さんのあの慌てよう…

チツ。雄二の他に正吾までをこの手に掛けなきゃいけないとはね…

「そ、それを言うなら愛子だって、土屋君のことを…」

「ゆ、優子！何を言ってるのかな!？」

反撃とばかりに、木下さんが攻める。

まさかムツツリー二まで…。ホントに残念だよ…。友人3人を処刑しないといけないなんて。

そんな状況で雄二の方を見ると、ニヤニヤしている。コイツ、楽しむ気だな？

「お前達、あいつらを狙うなら積極的にアタックしたほうがいいぞ？」

「ア、アタシ（ボク）たちはそんなんじゃない!？」

「…優子、愛子。逃げちゃダメ」

ここで、まさかの霧島さんの参戦。

「そうだ。とある情報筋からだが、あの性識者コンビは全学年女子から密かに人気があるらしい」

とある情報筋とは、我らが異端審問会だ。

「…この準決勝で更に人気上がるのは自明の理。それに」

その情報に更に追撃を加える霧島さん。ほんと、息ピッタリだよな。

「…私と雄二も、同じように結婚する仲間が増えるのは嬉しい」

「け、結婚!？」

「おい、ちょっと待て翔子!!結婚以前に俺達は付きあってたすらい

「ないぞ!?!」

これはアウトだね。後で教室に戻ったら3人とも異端審問会に報告しないと……フッフ、楽しみだなあ。

僕は空気みたいだし、先に眠って疲れを取らせて貰うよ。

「おい! 明久! 寝ようとしなくて、この状況をどうにかしてくれ!」

黙れ雄二。美人な霧島さんを誑かしてるなんて重罪だ!! 地獄に堕ちろ!!

心の中で呪詛を呟きながら眠りにつくのであった。



## 第十八話（後書き）

これ、決勝でよかったんじゃないかなって思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5628y/>

---

バカと忍と召喚獣

2012年1月2日06時49分発行